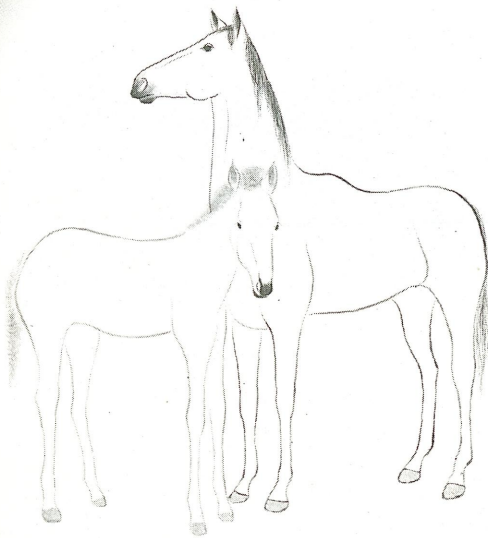


幼児の教玄月

第八十卷第十二号

日本幼稚園協会

家庭・保育所・幼稚園



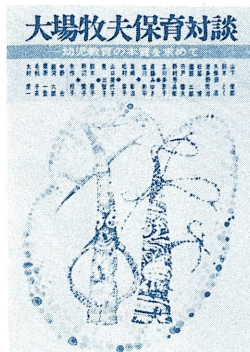
12

大場牧夫保育対談

幼児教育の本質を求めて

大場牧夫著

保育実践者が保育の本質と重要性をさぐる対談集



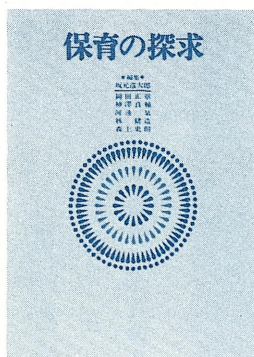
幼児をどのような人間に教育するのかという教育目標や、幼児保育は何をどう発展させるのかという実践の問題点など、保育の基本的な問題を取りあげて論ずる対談集です。

A5判・240頁・定価1,200円 千250円

新たなる保育を探る

保育の探求

編集 坂元彦太郎・岡田正章・神澤良輔・河邊 泉・林 健造・森上史朗



泥まみれの現実のなかに、幼児の豊かな可能性を信じていく——このロマンこそ、生きた教育の原点ではないか。本書は、幼児の実体を直視し、保育の現代化を探る近来の好著です。

A5判・428頁・定価2,000円 千300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



幼児の教育

第八十卷 第十二号

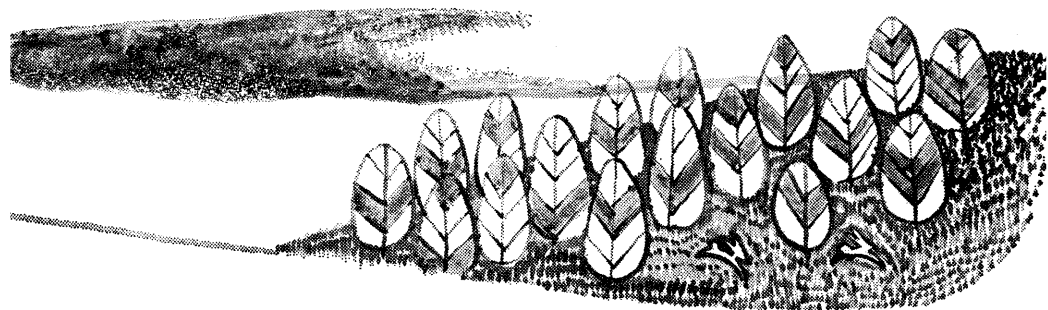
幼児の教育 目次

— 第八十巻 十二月号 —

© 1981

日本幼稚園協会

新教育実践の先駆者F・フレールベル……………	荘司雅子…(4)
フレールベルの活動の跡を訪ねて……………	岩崎次男…(6)
キュックリヒ女史とフレールベル……………	中原由利…(12)
子どもの友達フレールベル……………	山本礼子…(18)
フレールベルの恩物の今日の意味……………	荘司泰弘…(22)
「フレールベル全集」を読む……………	津守真…(26)
歴史人口学からみた生と死 十二(最終回)……………	鬼頭宏…(30)



『幼児の教育』戦後篇復刻のお知らせ……………(37)

エリクソンと幼児教育(6)……………仁科 弥 生……………(38)

子どもとの出会いの中で学ぶこと⑦……………水 沼 昭 子……………(46)

「伝記にみる人間形成物語」の執筆を終えて……………西 平 直 喜……………(48)

保育の一日(3)……………津 守 真……………(53)

——存在世界としての保育——

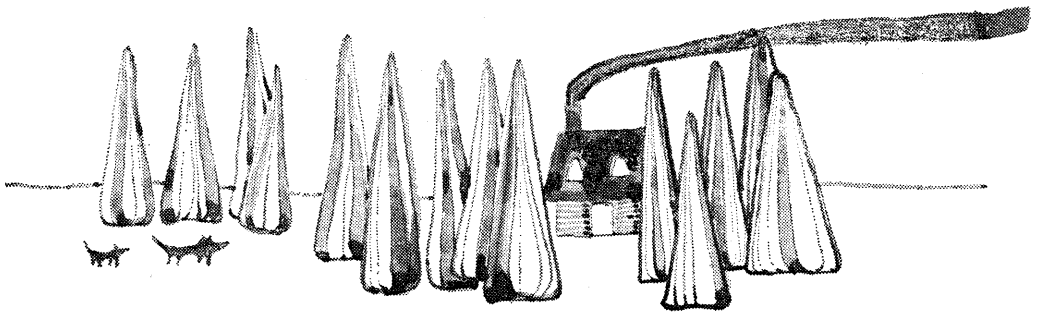
第八十卷総目録……………(61)

表紙・中村 宗弘 表紙題字・比田井和子 カット・福田 理恵

編集委員 外山滋比古・村石 京子

本田 和子・永井 正子

編集主任 津守 真・皆川美恵子



新教育実践の先駆者F・フレーベル

莊 司 雅 子

F・フレーベルの生誕二百年記念を来年一九八二年に迎へ、世界最初の幼稚園の発祥地であるブランケンブルク*では、目下フレーベル博物館の改築中であり、フレーベルが初めて学生生活をしたエナ大学では二百年記念祭の諸行事の準備に追われているようである。ブランケンブルクは一八三七年にフレーベルがここを根城にして乳幼児のための教育遊具を考案し製作し、そして乳幼児教育を実践し、世界最初のキンダーガルテンを創設したところである。このように純粋に教育的な意図をもって系統的に遊具を考案し、製作したのは、フレーベルが世界で最初の人であるといつてよい。またこの遊具をもって子どもを誕生と同時に四肢五官の訓練と精神の発達をはかるうとしたいわゆる真の意味の早教育をしたのも世界ではフレーベルが最初であるといつてよい。更にこのような早教育を指導する専門の幼児保育者や幼児教育者の養成をしたのも世界ではフレーベルが初めてである。

幼児期の教育は言葉や文字や数字などのような抽象的なものによるのではなくて、あくまでも子どもの発達段階に応じた、具体的な事物や実物を直接に子に聴かせる、見せる、触れさせる、つまり幼児自身が直接に身体全体で体験することによって、はじめて効果があがるものであることを、自らの教育実践を通して強調した世界最初の教育学者はまさにわがF・フレーベルであった。フレーベルの幼児教育の目ざすところは、あくまでも幼児のもっている本来の活動衝動や創造衝動を健全に保育し、それがやがて子どもが成長した後文化を創造する人間になり、それによって地上における人間のもっている天職を果せるところにある。そしてその教育方法は、あくまでも児童中心主義であり、子どもの創造的自己活動・生命の連続発展・個性・社会性・体験・興味などの諸原理にもとづいている。そしてこれらの諸原理はその後の新教育運動の源泉になっていることは人びとの知るところで

ある。

さてフレールベルが幼児教育を実践しようとしたのは一八三六年彼が五四歳の時であり、翌年ブランケンブルクで教育遊具を製作して幼児教育を実践した。それまではカイルハウというところに学園を開いて初等教育を実践していた。この学園での教育から、フレールベルは当時行われている教師中心・教科書中心・大人中心の教育、読み・書き・算数を機械的に学習させるような生命のない教育に対して思い切った革新的な教育を実践したのである。もちろんそのため、フレールベルは旧教徒や保守派の教育者たちから多くの迫害を受け、カイルハウ学園はひどい苦難に陥ったことは記録に明らかである。ところがフレールベルは周囲の迫害に抵抗しつつ、あくまでも自己の信ずる真の教育原理を実践しつづけ、しかもその後それを幼児教育の発達段階に即して実践したのである。

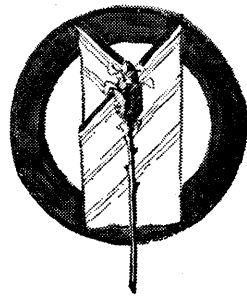
新教育運動は周知の通り、アメリカに発足したのであるが、この運動を展開した人は、いうまでもなく、アメリカの偉大な哲学者であり教育学者であるJ・デューイである。デューイの設立したシカゴの実験学校は、まさにフレールベルの精神

の応用ないし具体化であるが、デューイ自身この間の消息をその著『学校と社会』(School and society 1899)の第五章「フレールベルの教育原理」の中にはつぎの通りに述べている。「この小学校はその全課程——現在四歳から一三歳までの児童が在学しているが——を通じてフレールベルがおそらく初めて意識的に提唱したあの一連の原理を実行しようと努力していることを暗示するものである。これは明らかにフレールベルの教育原理を幼稚園以上の教育段階にも適用しようとしたフレールベル運動に外ならない。」アメリカにおける新教育運動は、このようにデューイの設立したシカゴの実験学校に始まり、次第に発展してチャイルドセンタースクール、プロジェクトメソッド、ドルトンプラン、ヴィネットカシステム、ワークブックプランとなり、さらにキルパトリックを中心とするコミュニティスクールの運動ともなった。これらの新教育運動の諸原理は前に述べたように、すでにフレールベルがカイルハウ学園で、そしてブランケンブルクのキンダーガルテンで実践していた。フレールベルこそ新教育実践の先駆者であるといえる。

* 現在は Bad Brankenburg と呼んでいる。

フレibelの活動の跡を訪ねて

岩崎 次男



ペスタロッチ「フレibel」ハウス

私のフレibel研究は大学の学生時代にはじまった。それ以来、もちろんフレibelだけを研究してきたわけではないが、長い年月がたつ。この研究の過程で、私は文献をとおしてフレibelが生きた風土を推察してきた。そして、私はこの推察が少しでも実際にたしかめられれば、と願ってきた。この願いが、幸いなことに、一昨年及び昨年と二回にわたってかなえられることになった。

一昨年はじめてドイツを訪れた時、最初に見学したのは、西ベルリンの、この施設の創立者の夫の名前をとって名づけられたカ

ルル・シュラーダー街にある、ペスタロッチ「フレibel」ハウスであった。このハウスは、マーレンホルツ「ビュローウ夫人」が設立した民衆幼稚園⁽¹⁾をゆずり受けたシュラーダー「ブライマン夫人」が、一八七四年、これをもとにベルリンの貧民及び労働者の子どもや女性のための総合施設として拡充発展させたものであった。

そしてその後今日まで一世紀のあまりの長きにわたって、このハウスは、ドイツのフレibel運動の中心であること及び多数の幼児保育者を輩出することなどによって、ドイツの幼児保育をリードする役割りを果たしてきた。このようなハウスを、さらには、わが国の子どもたちの福祉と教育にその生涯を捧げ、ユニークな保育実践を行ったキュックリヒ女史を輩出したこのハウスを見学する

ことは、感激であった。このハウスには、今日、保育所⁽²⁾、幼稚園、学童保育所、小児科診療所、社会福祉職員・教員養成大学、児童公園、ベルリン保育所協会などがおかれ、このハウスの児童の福祉と教育のための多彩な活躍ぶりがしのべられた。

このハウスの創立者シュラーダー・ブライマン夫人は、フレールの姪娘であり、晩年のフレールに直接教えを受けた。彼女は、「フレールを正しく利用するためには、とくにペスタロッチを正しく理解しなければならぬ」と説き、「ペスタロッチとフレールとの融合」にもとづく独自の教育の思想と実践を發展させた。⁽³⁾このような立場から、ペスタロッチ・フレール・ハウスという名称が生まれてきたのである。

ペスタロッチ・フレール・ハウスが創立された一八七四年、ドイツのフレール運動を結集する組織、「ドイツ・フレール連合」が結成されたが、この組織が第二次世界大戦後の一九四八年には、「ペスタロッチ・フレール連合」として再発足することになる。このことからみても、ペスタロッチ・フレール・ハウスの、あるいはシュラーダー・ブライマン夫人の理念が今日も継承され生きつづいているように感じられる。ドイツの幼稚園が児童福祉施設として位置づけられてきたこと、今日もなお西ドイツではそのように位置づけられていることは、このペスタロッチ

チ・フレール・ハウス⁽⁴⁾のあり方と深くかかわっていると思われる。

フレールの主たる活動舞台——テューリンゲンの森

ついで、私たち⁽⁴⁾はフレールの生地オーバーワイスマ、フレールの名著『人間の教育』が生まれてきた、かの有名なカイルハウ学園⁽⁵⁾のあったカイルハウ、及び幼稚園の創立されたバード・ブランケンブルクを訪れた。これらはテューリンゲンの森の東北部に位置している。

一昨年のドイツ訪問で最後に訪れたところは、バード・リーベンシュタイン、マリインタール及びシュワイナである。これらの土地は、フレールがその晩年を送ったところである。バード・リーベンシュタインは、今日もエピソードとして語りつがれている。⁽⁶⁾当時のドイツの第一級の教育学者ディースターヴェークやフレールの第一の使徒と言われるマールホルツ・ビュローウ夫人とフレールとの出会いの場所であり、マリインタールはフレールが亡くなったところであり、シュワイナにはフレールの第二恩物を象った墓がある。これらの土地は、テューリンゲンの森の西北部にある。

このようにみると、フレールはテューリンゲンの森の中

で生まれ、育ち、活動し、そしてそこで亡くなった、といつてもよいように思われる。テューリンゲンの森はドイツにおいてとくに自然の美しいところとして定評がある。そして、テューリンゲンの森に抱かれたこれらの土地はすべて田舎である。とくに、フレibelが生まれ育ったオーバーワイスバハは、テューリンゲンの森の最も奥深いところにある。この田舎で、フレibelは信仰厚いプロテスタントの牧師の息子として生まれ、育てられた。

フレibelの生涯は多くこのような田舎でおくられたが、このテューリンゲンの森に接して、その北側にはほ一直線に、アイゼナハ、ゴータ、エアフルト、ワイマール、イェナ、ドレスデンなどの、ドイツ文化を絢爛と花咲かせた諸都市が並んでいる。アイゼナハにはルターが隠棲し、ドイツ語訳聖書を完成したワルトブルク城がある。ゴータは世界最初の義務教育制度を確立したゴータ公国の首都であり、その近くのシュネッペンタールには長く栄えたザルツマンの汎愛学院があった。エアフルトには、人文主義大学として改造され、そこにルターも学んだ大学があった。ワイマールはゲーテとシラーの町として有名であり、当時、ドイツ文化の一つの中心地であった。イェナにはシラー大学があり、ここではシラー、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルらが教鞭をとり、当時ここにはロマン主義の風潮がみなぎっていた。ドレスデンは

「北のフィレンツェ」と称され、ドイツ最大の芸術都市である。

フレibelはこれらの都市のかもしれないが、文化の香りにもふれて、育つたと思われる。事実、フレibelはイェナ大学に学んでいるし、また教育者の運命がまぢかまえていたフランクフルト／Mに行く途中、アイゼナハを通り、ルターの事績をしのんでいる。

フレibelの教育思想の若干の考察

かくて、フレibelの教育思想を育んだ風土は、美しい自然、

純朴な、信仰厚い田舎及びロマン主義文化を中心とするドイツ文化であったといつてよいように思われる。素朴な片田舎で純朴に、信仰厚く育てられたフレibelを想定してみれば、私たちはフレibelが『人間の教育』の冒頭で語った言葉——「万物の中に一つの永遠の法則があつて、作用しかつ支配している。

この万物を支配している法則の基礎に、神が必然的にある」——この言葉でもって展開されているフレibelの汎神論的あるいは万有在神論的世界観、及びこの世界観にもとづくフレibelの児童神性論を理解することができるであろう。彼の児童神性論は、カトリック教会の成立に向つて歴史的に人為的に形成されてきたキリスト教的原罪説的人間観と異なるものであるが、世界の多くの純朴な人々の心の共鳴を得ることができたように思われる。わ

が国でも子どもは神からの授りものという言葉があるが、この言葉に代表されるような児童観が、非常にすんなりとフレイベルの児童神性論及びそれにもとづくフレイベルの教育原理を受け入れさせたであろう。そこに、フレイベルの幼稚園が半世紀ばかりのうちに世界にひろがって、世界の幼児教育制度の根幹をなした原因の一つがあったように思われる。

テューリンゲンの森の自然の美しさは、実際に見なければ、わからない。それほど自然の美しさが、フレイベルをして自然の中にも神が宿り、自然を手本にして教育を考えるべきことを主張させたように思われる。フレイベルにとって、自然の美しさは自然の中にある神性の表現であり、自然の、とりわけ樹木の生長は人間の成長発達の鑑であり、自然に対する人間の適切な営み——農業や園芸——は教育の原理にも通ずるものであった。そこから、受動的・追隨的教育の原理が主張され、栽培活動の教育的意義が強調され、子どもたちの庭としての幼稚園の名称が考え出されたりしたのであった。⁽⁸⁾

フレイベルは彼の連続的発達観の中に弁証法的発達観を含みこませることによって、幼児を発見することができた。⁽⁹⁾そして、その幼児の最高の発達の姿が、子どもの内心あるいは内的欲求の自由な表現である遊びである、と考えられた。このような考えが今

日もその発想に学ぶべき恩物の考案に結びつき、幼稚園の保育内容を創造的な、また共同的な遊びを中心にして構成する、今日もなお重要な構想を生み出したのであった。

このようなフレイベルの教育思想がロマン主義といわれる「教育学の世紀」⁽¹⁰⁾などによって特徴づけられる当時のドイツ文化の中で醸成されたことも、言うまでもない。フレイベルが三月革命前夜における最も徹底したドイツ国民教育の主権者であるといわれる場合、その国民教育論には明白にフィヒテのその影響が認められるし、さらには、ルター以来築かれてきたドイツ民族文化への憧憬がこめられているようにも思われる。

再度フレイベルの遺跡を訪ねて

昨年再び、しかしこの度は独りで、私はテューリンゲンの森を訪れた。一昨年シュワイナを訪れた時、アルテンシュタインの丘に行く機会がなかったし、また、カイルハウをゆっくり見学する時間がなかったからである。今回は、この両者について心ゆくまで見学することができた。アルテンシュタインの丘は山ともいえないので、そこにはまことに美しいアルテンシュタイン城があり、その前が開けている。この広場で、一八五〇年、フレイベルによって最も「盛大な子ども遊び祭り」が行われた。近隣近在の

町や村から小学校や幼稚園の教師たちにひきいられた子どもたちが三百人以上も集まり、沢山の観衆の中で、フレイベルの指導の下に、行進遊びや円陣遊びなどからなる、多彩な運動遊びが展開された。それはフレイベルの幼稚園の原理の一大デモンストレーションであったが、この美しいアルテンシュタイン城の前の、なだらかに傾斜した広場は、それにうってつけであるように思われ、しばし私はそこで往時をしのみだ。

カイルハウでは、フレイベル博物館長ヒューベナー氏の案内で、一昨年短い時間のため遂に発見できなかった、フレイベルの教育事業にその生涯を捧げた二人の協力者、ミッデンドルフとラングタールの墓に詣ることができた。またヒューベナー氏に会うのに若干の時間があったので、私はカイルハウのあちこちを散策することができた。フレイベルはカイルハウと山一つへだてたバード・ブランケンブルクとの間をよく行き来したはずである。そして、一八四〇年の春、その山道からバード・ブランケンブルクの町を見下ろしながら、幼稚園の名称を発見したといわれる、有名なエピソードがあるが、その山道はどこであろうかと、私はカイルハウ学園の裏手の山をあちこち歩いてみたりした。

それにしても、カイルハウは大変な田舎である。それは彼の生地オーバーワイスバハに劣らないほどである。こうした片田舎に

身をおいてみてはじめて、フレイベルが『人間の教育』でかかげた生活理想、「信仰、勤労及び節制」の生活——祈り、働き、節制する生活——がすんなり理解されるように思われた。それはまことに素朴な生活理想であるが、心を高くもち、勤勉に働き、欲望を適切に抑制する生活は、普遍妥当の生活理想でもあるように思われる。それはかつて中世修道院の理想であったが、今日もなお生活の理想たりうるように思われる。昨年はまた、私はスイスにおけるフレイベルの活動の跡（ワルテンゼー、ウイリザウ及びブルクドルフ）を訪れた。この訪問は、恐らく、日本人としては私が最初ではなからうか。その報告については、すでに他の所で公けにされているので、⁽¹⁾ここではくりかえさない。

スイスの活動の地も含めて、フレイベルが活動した場所は多く田舎である。そして、彼が相手にした子どもたちは、多い時でも四〇人をこえる時はなかったと思われる。このようなまことに地味な状況の下にあっても、生涯にわたって燃やしつづけた、あのフレイベルの教育情熱の火はどこから来ただろうか。この問いを、私はカイルハウの界限を散策しながら、またワルテンゼーの小さな城からゼンバッハ湖を見おろしながら、問いつづけた。

〔注〕

(1) 幼稚園はフレイベルの創立後、徐々に階層分化し、上流階級の幼児を対象とする家庭連合幼稚園、中産市民層の幼児を対象とする市民幼稚

園、及び貧民、労働者の幼児を対象とする民衆幼稚園などが生まれた。これらは市民学校や民衆学校等に対応する呼称である。民衆幼稚園には、在来の託児所が幼稚園の原理の導入によって改造されたものもあり、長時間保育の、無料の又は低廉な保育料しか徴収しない幼稚園であった。これにあたるイギリスやアメリカのものは、無料幼稚園とか慈善幼稚園とか呼ばれたりした。

(2) クリッペ。三歳未満の乳幼児対象の保育施設。

(3) シュラーダー・ブライマン夫人の思想と事績については、梅根悟監修『幼児教育史』、世界教育史大系21、講談社、昭和四九年、二八二—二九一頁、及び岩崎次男編『近代幼児教育史』明治図書、一九七九年、三九—四二頁を参照されたい。

(4) 一昨年のフレibel遺跡の訪問は、埼玉県私立保育園連盟の方々と一緒であった。

(5) この学園は「一般ドイツ教育舎」と称し、『人間の教育』はこの学園で試みられている教育を論じたものであることが、明記されている。

(6) マーレンホルツルヒューロウ男爵夫人はいつものようにバード・リーベンシュタインに保養に来た。そして、彼女は宿の亭主に、何か変わった珍しいことはありませんかと尋ねた。宿の亭主は、こんな田舎ですから別段変わったことはありませんが、最近どこからか爺さんがやって来て、毎日百姓の子どもたちを集めては遊んではかりるので、「馬鹿爺さん」と呼ばれ、それがちょっと評判をよんでおります、と答えた。夫人は早速保養仲間と一緒にこの爺さんの見物に出かけた。そして、この爺さんが子どもたちに打ちこんでいる真摯な姿に打たれ、爺さんが情熱をこめて語る子どもの教育の深い意味にふれ、夫人はすっかり感動してしまっただ。そして、夫人はその後の生涯をこの爺さんの提唱する教育事業に捧げることになった。この爺さんがフレibelであり、そして時は一八四九年であった。

同じ年、デイスターヴェークもバード・リーベンシュタインに来ていた。そして、同じように、彼もフレibelに実際に接するようになった。

て、フレibelの教育学的魅力の虜になった。そのため、三週間の保養の子定が三か月にものびてしまったといわれる。その間、デイスターヴェークは足しげくフレibelのもとに通い、フレibelの教えを受けたが、同じようにフレibelのもとへ通っていたのがマーレンホルツルヒューロウ夫人であった。夫人たちの連れて来た上流階級の子どもたちが、フレibelの指導の下に全く平等に貧しい百姓の子どもたちと一緒に遊んでいる姿を見て、デイスターヴェークはこれこそが後の世にきつとその真価が認められることになるであろう、「ほんとうの国民幼稚園」だと呼んだのであった。その後、彼は二人の娘をフレibelのもとへ派遣して幼稚園教員として養成し、フレibel運動に対する支援を惜しまなかった。

(7) ただし、フレibelが生涯、教育者としての道を歩くようになる転機が作られたフランクフルト/Mは、当時も大都市であった。今日、大変貌をとげているこの都では、フレibelの活動の跡——ベスタロッチ主義者グルナー校長が指導し、フレibelが教師としての第一歩を印した模範学校、及びフレibelが家庭教師をしたホルツハウゼン家の邸宅——をしのぶことはできない。

(8) 幼稚園の名称は、園丁が庭で植物を育てるやり方が受動的・追隨的教育の原理をよく表現していることによつて、また幼稚園には、子どもたちが個人的に、あるいは集团的、協同的に栽培活動を行う庭を設けなければならぬことによつて、フレibelによつて考え出された。

(9) フレibelの発達観については、岩崎次男編、前掲書を参照されたい。
(10) 一八世紀後半から一九世紀はじめにかけて、汎愛主義者たちを中心に、ドイツでは沢山の教育論が公けにされ、新しい教育の試みが行われた。それは近代市民社会を生み出す教育的努力であったが、世にドイツのこの時代を指して「教育学の世紀」という。

(11) 今日、カイルハウ学園の建物は言語治療学校として利用されている。それは社会主義国家らしいフレibelの遺跡の利用であると思われた。

(12) 『近代幼児教育史研究会会報』第一〇号、一九八一年三月、五七頁。



キユツクリヒ女史とフレイベル

中原由利

ゲルトルト・E・キユツクリヒ (Gertrud・E・Kieckhef) 女史

は、一八九七年十二月二十五日ドイツのシュツトガルトで、教師の娘として誕生した。四人兄弟の末っ子として家族の愛情を一身に集めて成長したが、九歳の時生母を亡くした。その後ベルリンのハイスクールを卒業し、続いて同じベルリン市内にあるベスタロッチー・フレイベルハウスという教員養成校に学んだ。この学校は、フレイベルの姪で、若い日にフレイベルと共に、フレイベルの幼稚園で働いていたヘンリッテ・シュラーデルという人によって、一八七四年に設立されたのである。現在も五〇〇名の学

生があり、幼児教育はまず母親の教育からというフレイベルの主旨を目標とした幼児教育者の養成、及び貧しい子供への教育をしたベスタロッチーの遺志に従う、社会福祉事業家と、家政婦を養成している学校であり、百年を越える歴史と伝統に支えられつつ、時代の要請に応える働きが今なお続けられているのである。

フレイベルとの出会い

キユツクリヒはこの学校に二カ年学んだが、この時彼女はフレイベルと出会った。そして彼女を生涯幼児教育の道に歩ませるこ

とになったのである。しかも彼女がその生涯をかけて幼子を愛し、母親を尊み、保育者をつくしんだ心は、キリスト者としての深い信仰によるところが大きい。彼女自身幼児教育者としての誇りと自信は、若い日にこの学校において、フレーベルの直接の弟子であったヘンリッテ・シュラーデルから、直接幼児教育を学んだことによる、フレーベル直系の孫弟子としてのゆるがし難い事実によるのである。

キュックリヒが世を去る（一九七六年一月二日召天）しばらく前に、広島大学名誉教授の荏司雅子氏との対談の冒頭に、次のように述べている。「私の勉強した学校の名誉校長であるヘンリッテ・シュラーデルが、フレーベルの幼稚園（ドイツに作られた世界最初の幼稚園）でフレーベルに教えられて保育者になり、あとでベルリンに学校を開いて私共を教えて下さったのです。すばらしいおばあちゃんでしたが、講義のとき、私、ほんとによそ行きのように思っていて、父フレーベルはいいました。あなた方はその子、その責任者である」といわれ、私はほんとうに孫だと思っていませう」（『保育専科』対談「愛の心で子らとともに」より、一九七六年四月号）

日本の幼児教育のために献身

キュックリヒは、一九二二年（大正十一年）十月十五日、二十四歳の若さで故国ドイツを後にし、単身日本にやって来たのである。この日を迎えるために若い彼女はどんなに悩んだことか。しかしあるとき、日本への召命を強く感じ、当時、第一次世界大戦で荒廃した祖国ドイツの子供たちの教育に、その一身を捧げる決意をもって児童保養施設で働いていたが、その中で彼女は神に祈って日本の子供たちのために働く決心を、その心のうちに深く固めていったのである。

来日早々、キュックリヒは、東京において向島教会、及び目白にあった福音教会本部に保母養成所を作った。ペスタロッチ・フレーベルハウスを卒業した後、彼女は更に女子高等師範学校に学んだので、幼児教育者の養成は彼女にとって使命であった。この保母養成所は、一九三二年東京保育女学院となり、二年課程の本格的な幼児教育者の養成機関となった。しかし後に東洋英和女学校幼稚園師範科に吸収合併され、彼女も同校で教えることとなった。

又、キュックリヒは幼児教育者養成のかたわら、向島鐘ヶ淵に子供の家託児所を開設し、当時東京下町の働く母親のために、子供たちを預り、保育者としての実践にも励み、第二次世界大戦中も日本にとどまり、この事業のために尽した。しかし一九四五年

(昭和二十年)八月十五日、日本の敗戦が決定した日に、彼女の愛した学校も、教会も、子供の家もすべて灰尽に帰っていた。終戦後教会員の紹介により、彼女の次の働きの場は埼玉県礼羽村(現在加須市)に与えられ、現在では社会福祉法人愛の泉という、乳児院、保育所、養護施設の三つの児童福祉施設と、養護老人ホームを含む総合社会福祉事業にまで成長発展したこの事業に、当時敗戦による、肉親と家をなくした浮浪児の收容から始めて、彼女はその生涯をかけて、天に召されるその日まで、情熱をもってこの事業に努力し続けたのである。

母親への教育

キョックリヒは、その若い日にペスタロッチー・フレーベルハウスに学んだが、彼女はフレーベルが主唱した、同校の幼児教育者養成の教育目標である、「幼児教育はまず母親の教育」を、五十余年にわたる彼女の幼児教育への献身の中で貫き通した。

フレーベルの名著の一つである『母の歌と愛撫の歌』に流れている、フレーベルの教育思想に対する彼女の理解と解説は秀逸である。彼女は九歳の時生母を亡くしたことにより、彼女の生涯の大きな憧れは、自分が「お母さん」になることであつたと後年述懐しているが、フレーベルの教育思想と相俟って、フレーベルの

教育思想の中で、特に彼女に与えた影響は、女性がほんとうの母の目をもち、母の心をもち、母の姿となるということである。

彼女はよく講演を頼まれたが、よくわかる日本語を駆使して、内容の深い講演をした。その講演の中で、母の会の際にはよく「あゝかあちゃん」と、居並ぶ母親に呼びかけたが、その呼びかけには力があつた。彼女の生涯の憧れであつた「かあちゃん」たちを目の前にして話すが、彼女自身も当時埼玉県加須市につくつた社会福祉法人「愛の泉」において、收容されている多くの子供たちの「かあちゃん」でもあつた。

フレーベルは『母の歌と愛撫の歌』の中で、我が子を抱いている時、我が子をつめる時、我が子と遊ぶ時、母親は幸せと喜びを感じるが、同時に我が子に対する責任、それは我が子の信仰と、希望と、愛を育てることにあることを述べているが、彼女も母親の理想について語っている。彼女は、世のすべての母親や保育者が、ほんとうの母としての心をもつことを理想として語り続けた。幼い人を教育する、すべての人に母の心を語り続けた。

「近頃のお母さんはホテルのお姉さんみたい、衣食住だけ面倒みて、子供そのものには手をつけない方がいいと無責任な考えをしている」と彼女はなげいていたが、それでもなおかつ彼女は、子供の豊かな成長のために、世の女性のすべてが、ほんとうの母に

なることを語り続けた。

「女性の特徴は情緒です。火花のように、火のように、又星のように、太陽のように、情緒的なものが豊かなのが女性です。そして女性の体から生命は生れ、生命を運ぶ、生命の持ち主、それが最も大事な女性の特徴です。フレイベルは、この女性の感情、生命を保護する母親愛によって、健全な家庭の愛が生まれるといっているのです」（『乳幼児の教育』第15号巻頭言より）と、キュックリヒは語り続けたのである。

幼子への愛

牧師の子であったキュックリヒは、敬虔なクリスチャンとして、その生涯を貫き通した。だから彼女の思想の根底を支えたのはキリスト教であった。人間は神によって創られたものであり、その人間を取り巻くすべてのものも、神の作品であって、その作品の中に生きる、働くもの、すべてを納めるものは神であるという信仰に立脚した彼女の思想は、二千年の歴史をもつキリスト教が、ヨーロッパに根づき、生を受けたものの生きる姿勢を絶えず問いかけつつ、人々の心を支え、多くの文化を生み出す原動力となった豊かな土壌の中で、育くまれたものであった。だからフレイベルの第一の名著『人間教育』の冒頭のことばである「凡そ天

地間の万物の中には、ひとつの永久不滅の法則が存在し、これが万物を生かし、且つこれを支配している。」は、フレイベルと同じ国に生れ、同じ土壌の中で育った彼女にとっては、至極当然のことばとしてこれを受けとっている。そしてフレイベルのいう、人間は生まれながらに神性をもっている、という思想も、彼女は特にフレイベル独特の思想とは思わず、ヨーロッパをヨーロッパたらしめたキリスト教による人間観である、と語っている。神が創られた作品である人間が、神の意志に従って、この世において与えられた才能を十分發揮できるようにするために、教科書式に子供に与えるのでなく、一人一人の子供に対して、違う目、違う手、違うことばが何より必要であるといった。

彼女は、神の創られたすべてのものの中で最も大事なものは人間である。その人間の、今生れたばかりの、汚れていない、与えるもの全部を素直に受け入れる赤ちゃんや幼子たち、だから乳児期、幼児期は人間づくりの最も大切なときである。これはフレイベルの教えの筋であるといっている。

しかしフレイベル直系の孫弟子としての誇りをもつキュックリヒは、その財産としての教育思想をただ受継ぐだけではなかった。幼児教育の原点としてのフレイベルの思想を十分理解と尊重はしているが、その真理に立脚して現代の幼子には何が必要か、

どのようにそれを生かすべきかを問いつけ、現代に生きる孫弟子として、むしろフレーベルの今日的な意味を探り続けることに、使命と責任を痛感していたといえよう。

フレーベルの代名詞ともいべき恩物について、キュックリヒはまず時代を考えなくてはいけないという。フレーベルの時代は人間が少なかった。子供が何をするにも空間と時間が十分にあり、一人の子供が支配できる領域がどこにでもあった。しかし現代は子供の数が多く、十分に支配できる場所を与えられない。だからフレーベルが考案した通りにすることはむずかしい。しかしその通りにしなくても子供は恩物で遊びながらいろいろなることを発見していく。この発見していくことがとても大切で、発見したことを喜んで認めていく。今フレーベルに聞いてみたいと思う。現代に生きる子供に恩物を与えた時には、子供はすばらしい発見をするが、それを認めたいといえば、フレーベルはこの孫弟子の意見に賛成するはずである。要は遊び方の方法ではなく、恩物で遊ぶことにより、子供の創造力を刺激し、遊びたくなる意欲を盛んにすること、そして自分の考える目的に向かって作り上げていくことが大切であると彼女は強調した。その時、恩物は十分現代の子供たちの知能の発達に答えるだけの要素を、そのうちにもっていることを彼女はつけ加えることを忘れなかった。

保育者の養成

キュックリヒを生涯日本にとどまらず決心をさせたのは、関東大震災の焼野ヶ原に建った掘立小屋の軒先のあきカンに咲いた一輪の朝顔であった。罹災したにもかかわらず、花を咲かせるやさしい心に打たれ、この心をもつ日本人のためにと、大震災の翌年、早速保育者の養成をはじめた。彼女は、「私たち幼児教育にたずさわる者は、たとえ子供を生まなくても、母の心、母の愛をもたなくてはいけません。保育者は母でなければなりません」と語り、女性の生活、女性の使命は、ひとを保護し、ひとを養い、ひとを助けることであり、とり分け幼子とともにあること、幼子を愛し、育てることこそ、女性にとって最もふさわしい仕事であり、最も大切な仕事であることを強く訴え続けた。そしてフレーベルの有名なことばである「さあ！ 私たちの子供らに生きようではないか (Kommt, laßt uns unsern Kindern leben)」を、彼女は自ら五十有余年の働きの中で証ししていったのである。戦前は自らが創立した東京保育女学院、東洋英和女学校幼稚園師範科に、戦後は草苑学園、和泉短大において保育者の養成に力をそそいだ。フレーベルの孫弟子としての彼女の、情熱と祈りをこめて語ることばに、生徒たちは魅了され、その生涯の働きとして保育者

の道を選んだことに誇りと自信をもった。

キュックリヒのもう一つの大きな働きは、一九三一年（昭和六年）に日本におけるキリスト教保育にたざざる保育者の集団として、基督教保育連盟（現社団法人キリスト教保育連盟）設立に参画し、これを指導し、育て上げることに直接たざわったことである。当時 J K U (Japan Kindergarten Union) という幼児教育関係宣教師の集りがあり、この中に日本人のキリスト教保育者も加わって共に学んでいたが、年毎に日本人の数も増え実力もともなってきたことにより、独立の準備が進められ、日本人の手によるキリスト教幼稚園の大同団結が実現したのである。そして多くの宣教師たちは、この基督教保育連盟を育てるために協力したが、特にキュックリヒは最初から役員として、その運営と内容充実のために力をそそいだ。戦後は特に副理事長の要職にあり、求められるままに北海道から九州にいたる各地の保育者の研修会に、各地の幼稚園、保育所の母の会に出席し、保育の真理としてのフレイベルの教育思想に基づいて講演した。特にフレイベルの『母の歌と愛撫の歌』の例をあげては、永遠に変らぬ女性の特性を、使命を、語り続けた。

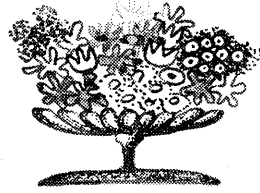
焼野原に一輪の朝顔を咲かせるやさしい日本人の心に打たれて、以来日本人を愛し、日本人のために、とりわけ女性と幼子の

ために働いたが、しかし彼女は、決してドイツ婦人としての誇りを生涯失うことがなかった。

彼女がよく語ったドイツ婦人の誇りであり、特徴である三つの K がある。

キュッへ(台所・Küche)、キント(子供・Kind)、キルへ(教会・Kirche)の三つである。台所は家庭を意味しているが、とりもなおさず、フレイベルの語る女性の特徴、その使命もこの三つの K を象徴的に語っている。

フレイベルと同じ国に生れ、同じ土壌に育ったキュックリヒは、若い日にフレイベル直伝の教育を受け、フレイベルとの出会いの中で自らの生涯の働きを決定し、ひたすらにその道を歩き通したが、彼女の生活そのものは、師の後に従うというよりも、フレイベルを自らのうちに消化し、自らがフレイベルと同化し、フレイベルとともに、変化の激しい現代の中にあって、むしろゆるぎない確固たる信念をもって、幼児教育の真理の火を輝き尽したといえよう。そして全国にある幼児教育者にその真理の火は、バトントッチされ、フレイベル生誕二百年記念を迎えた今日、キリストにある深い信仰と、フレイベルによる幼児教育の真理を語り続けたキュックリヒの働きは、フレイベルの名とともに、日本の幼児教育史に長く残るのであろう。(キュックリヒ記念財団)



子どもの友達フレイベル

山本礼子

恩物にかたどって作られた記念塔は、一八三七年八月一日付の日記に書かれていた「いざや、われらが子たちに生きようではないか」(Kommt, lasst uns unsern Kindern leben)のごとびが刻まれ、晩年のフレイベルが全精神を打ち込んだ幼稚園および保母養成所のみかくの小高い高原にあります。かつて、ここを訪れた倉橋惣三氏は、この記念塔の前に立って、しばし、はてしない追憶に耽ります。氏はフレイベルの学説を学び、それを批判し、しかし彼の人柄にいいしれぬ憧憬を抱いていた一人の先達であったといえましよう。氏はその足でシュワイナにあるフレイベルの墓に

詣で、馬車に同乗している女兒に「フレイベルってどんな人なの」と聞くと、その子は即座に「子どものお友達」と答えてくれたことに感激します。偉人とか、大教育者とは言わず、子ども達の仲間と表現されるすばらしさに動かされるのです。ばかおやじといわれながら子どもと共に過し、子どもと共に遊びたわむれる翁を想像します。それは子どもと打興じた良寛にも似た情景といえましよう。

(一)

一七八二年四月二十一日、ドイツ、チューリンゲンで出生した

フリーベルは、生後わずか九ヶ月で実母と死別します。父は牧師であり、非常に多忙な業務に追われますが、「田舎牧師の身分としては確かに稀に見る教育ある人であり、否な学者でもあれば経験家でもあり、倦むことを知らない活動家」であつたと息子フリーベルは自伝の中で評価しています。そのため父と共に過す時間が制約され、父に親しみの感情を持ちえず、「幼時から私は苦痛や圧迫のひどく多い人生闘争の洗礼を受け、そして不自然な生活と欠点の多い教育」とが彼の精神生活に多くの影響を与えたのでした。四歳の時、父が再婚し二度目の母を迎えますがやがて二人の間に溝ができ、心の交流がさざぎられてしまいます。この間の事情については長田新訳『フリーベル自伝』に詳細に記されておりますが、この自伝をもう一度ひもとくとき直す時、その文脈の間から、父ヨハン・ヤコブ・フリーベルからの影響は少なからずあつたというより、かなり強い影響があり彼の精神構造の構築の基礎をなしたと断定せざるをえないように思われます。彼の冥想と反省、彼の内的生活の発展と完成に大きく寄与しているといえますし。

「朝な夕な家族の全員が集つた。日曜日にさへ集つた」と記しています。日曜の聖日礼拝の前に旧ルター派の牧師であつた父は家族全員召集し、家庭礼拝を重んじたその荘厳な時間に、フリーベ

ルは自己を内的生命に導き込み、彼の心情生活を鼓舞し発展させ、かつ向上させて行くのでした。村立女子小学校の入学、この学校の選択にも父が大きく関与しています。教師の資質、学校の秩序など父の懐いていた予想と合致したため、規則を破つて女子の小学校に入学しました。そこでの生活は彼の内面性に全く一致していたと述懐しています。入学した第一週に暗記するために決められた聖句から深い印象をうけ、彼の心の琴線にふれるのでした。それはマタイによる福音書六章三三節の

「汝先づ神の国と神の義を求めよ」

というみことばでした。わずか七歳の少年の心をとらえたこの聖句は決して理解しやすいものではありません。しかしキリスト教の本質に迫るものであり、彼の地上での生活は、神の国を求めて歩みつづけた生涯であつたといえます。彼は正統派神学の立場に立つ父の説教を注意深く聞き、それに固執し、そこに「含蓄されている内部生命をその外殻から取り出す」のに懸命になるのでした。自伝にあるように「おそらく既にその時単純な少年の心情は此等の語句から彼らの生命の基礎と救済とを感じ理解し、否な、

更に奮闘努力するこの大人に取つて不拔の勇氣と不撓の犠牲の精神とそして犠牲を喜ぶ精神との源泉ともなつた信念を感得」したのでありましょう。十歳の時、母方の伯父の許での新生活がはじ

まりますが、その伯父が「お前は既にお前の父からいとも優れた教授をうけてたから」と評価しながら語りかけています。その地で通学した市立学校での宗教々授にも大きな魅力を感じます。

「特にイエスの生涯や事業や性格が述べられる時には私は屢々内面的にほんとうに溶かされたのである。その時はさめざめと泣き、何時かは私もこれに似た生活を送ることが出来るといふ、いとも確乎とした憧憬が私の心に充ち満ちた。」このように心の遍歴を叙述する彼ではありませんが、「私は私自身をも知らなければまた私の最も本来的の生命をも知らず、私の目標をも知らなければまた私の本来の人生行路をも知らなかった。」のでした。

奇しくも

「君は人間に食物を与へよ

人間に人間自身を与へることこそ

私の努力であつて欲しい」

と記念帳に書き留めさせたのは、何の働きであつたのでしょうか。必ずしも恵まれた環境の中で生育した彼ではありませんでした。魂の遍歴はそれ以上に苦渋にみちたものだったといえましょう。「飽くまでも有能な人間の完成は比較的生涯の遅い時代に来ることが稀ではない」ということばに支えられつつ、自己の全生活を賭けるべき仕事、活動を模索するのです。

彼の生きざまをここで詳細にふれて行くいとまはありません

が、これまで述べて来たようにキリスト教精神の真髓の発露が、フランクフルトでの教師生活体験を「彼は水中の魚・空飛ぶ鳥のやうに幸福だ」と語りしめたのだと思います。そして、さらに彼がもつとも信頼していた兄が病死し、依頼をうけた遺児三人の教育のため「すべてをみすてて、すべてを犠牲にして人間へ、人間教育へ帰って行く」のでした。他の従兄弟二人を加えて五人の子どもを対象にグリースハイムの「一般ドイツ教育所」で待望の教育活動に着手、フレイベル三十四歳。偶然の出来事が二度目の教育生活へと、そして終生その世界に生きたのでした。

(二)

その後の教育体験を通して、フレイベルは特に幼児教育の意味と価値を痛感します。そうした彼の活動の焦点は幼児教育にあてられ、遊具を作ること、保母の教育にしても、あるいは母性教育も、ひたすら幼な子の魂の醇化・育成のためであり、純粋な人間の高みへと向上させるためのものでした。ここでは、彼を特色づける遊具について考えてみてみましょう。

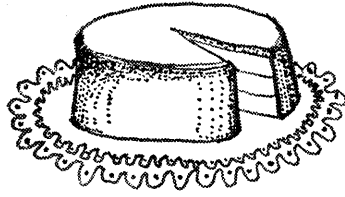
「精神が自己表現によって自覚するには材料を必要とする。精神は材料をとおしてのみ自己を表現することができ、また材料に加工することよつてのみ発展することができるからである。したがって幼児教育には形成させるための適当な材料をあたえなければ

ばならない。」と考へ、まず幼児に適當な遊具を与えねばならないと考へ、必要な遊具の考案と製作にとりかかります。かれの考案した遊具がかの有名な恩物 (Gabe) と呼ばれているものです。私共は、幼児の自己活動、創造活動のために欠くことのできない道具を作らうとするその姿勢と着眼点に敬服します。自然界の中にあるすべての形や性質や法則を象徴している遊具、子どもの象徴性を刺激するような遊具を考案します。それは日常性をもちながら、子どもの夢を發展させ、子どもの創造力を養成します。シンブルな形の中に子どもの夢がはぐくまれます。それにつけても近頃の子どもの玩具に問題を感じます。多くの玩具は複雑な構造をもち、高価なものになっています。子どもに夢を与えるのではなく、夢を奪ってしまうようなものも多々あります。今日、フレール（Freiluftspiel）の恩物が遊具として絶対的なものとして評価する人はいません。しかし、フレールが恩物を考案し製作した時のその底流にあった思想・願望に想いを馳せたいと思うのです。荏司雅子氏が指摘するように、フレールの恩物もつ二つの目標は「第一に恩物をおして自然を理解させるということ。第二に恩物によって子どもの創造力を陶冶するということ」にありました。子どもは子どもの生活空間に働きかけ、そこにあるものから何かを探し求めようとする衝動的な行動をつねにとっています。小石も木片

も子どもにとっては格好な遊び道具です。そこに着眼して「森羅万象のなかでもっとも単一な基本的な形態しかもその中に多様性を含んでいるボールをもって第一恩物としました。その他、立方体や直方体、またそれらの組み合わせなどの恩物はそれぞれに単純な基本的な形態のものです。彼がそれらの遊具を恩物 (Gabe) と名付け、神からの賜物と位置づけ、神の似姿に作られた幼な子をして、与えられた能力が充分に發揮できるようにそれらを活用しようとししました。

さきにふれましたように、彼の幼児教育の対象は、幼児であり、その幼児たちが使用する遊具でありました。と同時に教師教育・母親教育さらに家庭教育にまで敷衍します。「みつけた、その名は幼稚園でなければならぬ」(Ich hab's gefunden, Kindergarten soll seine Name sein) うらかな日の光に照り映える行手の美しい大きな花園のような場所を見て叫びました。これが今日の幼稚園という名称のはじまりですが、それは狭く囲まれた幼児の園ではなく、彼が夢みてきた幼な子のための楽園でした。

「まず、神の国を求めよ」との聖句にうながされて、地上に幼な子のための神の国の到来を待望した、そしてその実現のために種々の誤解や弾圧と戦った幼な子の友フレールの姿が彷彿と浮んでまいります。



フレイベルの恩物の今日的意味

莊 司 泰 弘

— 恩物の現状 —

毎年多くの保育者が養成されているが、幼稚園の創設者としてフレイベルを知っている人も、彼の恩物を知る人は少ない。フレイベルは恩物を広めるために幼稚園を考案したのだが、その幼稚園ですら恩物は片隅で埃を被っている。しかし、恩物を知らない人でも、ボールや積木、色板は知っているし、保育室には多種多様な変形恩物が溢れている。この様に保育現場に融け込んでいる恩

物ではあるけれど、残念なことには、当初フレイベルが意図した、保育者と子どもとの媒介物としての働きは軽視され、子どもだけが用いる単なる玩具として扱われているのが現状である。

フレイベルは教具と子ども間の保育作用を見過してはいないが、むしろ、彼の著書『母の歌と愛撫の歌』で我々に訴えかけたように、保育者と子ども関係の方に重きを置き、教具は媒介物であると考えていた。しかし、現状はどうであろうか。保育者は教具に頼り切り、ともすれば、子どもをより多く引き付ける教具を歓迎し、保育者が働きかけることは罪悪のように考えているよ

うにすら思える。なぜこうなってしまったのか。いくら良い教具を子どもに与えても、子どもが教具を使いこなせなければ無意味である。その助けをするのが教師ではなからうか。そのためには、保育者と子どもの愛情関係・信頼関係・尊重関係などが前提となるのである。フレーベルは子どもを花に、保育者を園丁に例え、幼稚園と名付けたのは、この関係を広く伝えたかったからである。恩物（スプリンクラーや肥料）の使い方ではなかったはずであるし、園丁が楽をする方法ではなかったはずである。いったいどこでフレーベルの精神が忘れられるようになったのかを追ってみよう。

—— 恩物の批判 ——

フレーベルの恩物は、デュイイ・Jやその弟子キルバトリック・W・Hによって、次の様に批判された。フレーベルの恩物は、恩物自体には幼児を引きつける魅力が十二分にあるのだが、児童中心主義の新教育の観点から考えると、幼児の自由な遊び方を認めないほど、整然と秩序立てられた系列教具であるため、幼児の創造性と自己活動を重視するフレーベル自身の思想と矛盾しているというのが彼らの主旨である。この批判によってフレーベルの

恩物は、世界の幼稚園から姿を消すようになった。また、日本でも倉橋惣三がフレーベルの思想から恩物を切り離し、独立した遊具として恩物を用いたことは周知の事実である。しかし、新教育学による子どもが系統的思考能力に欠け、子どもの興味に左右されるため、知識の伝達に片寄りが出た点を逆批判され、誘導保育場面においては、単なる玩具に転落したため、保育者と子どもとの関係を止揚させる媒介としての教具が再考されている現在、フレーベルの恩物の出番が巡ってきたと私は確信する。しかるに、なぜ日本の幼稚園は恩物に目を向けないのだろうか。その理由はフレーベルを日本へ導入した際の誤解の反動にあると考える。

—— 恩物の誤導 ——

当時の西欧文明に追いついたことを示す手段として、彼の理論ぬきで施設だけを導入した田中不二麻呂文部大輔の事や、フレーベルは孤児や貧民や障害児にも門を開いたのに、日本では貴族階級のみが入園を許された事や、当時の東京女子師範学校付属幼稚園の設立目的に明示されている様に、幼児の保育を目的とするのではなく、女教員の養成を目的として設立された事などから考えると、日本の幼稚園は、フレーベルの趣旨（子どもが自由に自発

的に遊べる子どものための子ども中心の花園」とはほど遠い、大人の都合による大人中心の出発をした事がわかる。この子どもを無視した大人中心の考え方は、目先の教育効果を追求する金儲主義の園や、型にはまった保育を繰返す教師中心の園を生み出す基盤となった。また、キリスト教的宗教観が根付いていなかった時代背景も忘れてはならない。このために、万物に神性が宿っていることや、幼児自身の神性については皮層的にしか述べられず、恩物のもつ「神性の象徴性」のみが強調されることになり、フレーベルの意図からはずれて、恩物の使用方法のみを異常に重視する保育内容になってしまった。この傾向は、WHY（なぜ？）を追求するフレーベルの子どもとともに考えていこうとする姿勢より離れ、HOW・TO（いかに？）を追求する「できるならばやらさなければならぬ」式の子どもの人格を無視した、技術的で余裕のない傾向を助長することになったのである。

では、本来の恩物とはどういうものかを探ってみよう。

—— 本来の恩物 ——

遊びは幼児が自己の内面を、自発的に自由に表現したものであり、自己の内面的本質の必要と要求に応じて、内面を外面に表わ

したものであるから、フレーベルは遊びによって、幼児の内的エネルギーを外部に表現させ、自己活動力を促進させようとした。

したがって、いかなる教具をどのようにして幼児に与えるかというよりは、いかなる教具を通して幼児自身の学習を助けるかということが重要になる。この点がデューイらの誤解をとく鍵となるであろう。つまり、フレーベルが強調したように、恩物は媒介であって、恩物自身が子どもに作用するのではなく、保育者と恩物・恩物と子ども・保育者と子ども、という三位一体の関係において、初めて保育効果が表われるのである。恩物は『母の歌と愛撫の歌』でフレーベルが意図したように、本来、マンツーマンで使用されるべきもので、一斉保育形態において、一対複数というような用い方をするものではないと私は考える。

幼児を嫌っている保育者（消極的拒否型）が、心の中で、「あんと遊ぶのは給料をもらうためよ。本当は煩わしいんだから」と思いつつ、「はい！ ○○ちゃん。こっちへおいで。かわいいね。一緒に遊ぼうね。」と口で言っても、幼児は決して寄ってこないのはなぜだろうか。幼児は大人の言葉よりも、眼を通して心の中を感じるからである。心から幼児が好きで、無条件に受容している人には、黙っていても幼児は寄ってくるものである。フレーベルは『母の歌と愛撫の歌』に見られるように、単に恩物の遊び方を

例示しただけではなく、むしろ、幼児を引き寄せる心を伝えようとしたのではなからうか。

—— 幼児不在の保育の警鐘として ——

ある幼児が園で漏らしてしまったとしよう。まず、教師はいかにして（HOW・TO）次から失敗せず、知らせるかを考え、即時即応して叱ったり、恥しめたり、威したりして漏らさないよう強化しようとする。そして、濡れた下着を手渡された母親は、恐縮し罪悪感に浸っている幼児を擷んで、「また洗わなきゃならぬじゃない。このアホ！」と突き離す。園でも町中でも似たような例が溢れています。教師は「なぜ？（WHY）」漏らしたのかを考へるべきであるし、母親は子どもの気持ちに共感するべきであろう。根底にある原因を取去らず表面的結果を治しても、次の問題行動が出るだけである。例えば、電気の流れているオシメをはかせれば、条件反射で漏らさなくなり、教師も母親も満足するのであるが、今度は登園拒否や緘黙など別の行動が出る。根底の原因を取去らなくてはいつまでも悪循環を繰返すだけである。根底から治すためには、子どもの側からの発想・子どもの立場を知ることが必要である。教師や母親も漏れた下着をつけてみて、寒

い、恥しい、早く着替えたい、温かいお風呂に入りたい、お母さんに慰めてもらいたい、などの子どもの内面を体験するべきである。実に多くの大人の側の発想や、大人の都合による危険に幼児が晒されていることに気付かれると思う。現在、3才から6才の幼児教育は、保育園と幼稚園（公立は5才）と3元化しているが、この分化は子どもの側から考慮されたものだろうか。幼児の発達に基づく基礎研究はどれだけあるのか。父母は家庭ですべきしつけをも園にまかせ、園は保育効果の上らないのは家庭教育の不備に原因があるとして、互いに責任を転嫁し合っている。学校内暴力、非行の低年令化など、すべての原因はこの大人の都合主義にあるのではなからうか。この様な幼児不在の保育に対して、恩物は警鐘を鳴らしているのです。フレイベルの恩物は幼児の自然観察から発案され、子どもの側から創られた教具である。現在の時代を考へるに、今こそ恩物に託したフレイベルの発想を想起し、これからの幼児教育にあたらうではありませんか。

（親和女子大学）



小原国芳、莊司雅子監修
「フレイベル全集」を読む

津 守 真

これは日本ではじめてのフレイベル全集の完訳である。記念すべき出版である。

とくに、莊司雅子氏が生涯をフレイベル研究に捧げられ、この全集完訳の大業をなしとげられたことに、心からの敬意を払うものである。

私は第四巻と第五巻を読んだが、この大型の書物を手にとっただけでも、何か大きな力に圧倒される。第四巻と第五巻の前半は、フレイベルの「幼稚園教育学」の翻訳である。私は「幼稚園

教育学」を読んだのはこれがはじめてである。

訳者あとがきに、莊司雅子氏が自ら記されているところによると、この訳稿は、昭和十三年に広島文理科大学教育学科を卒業された後数年間に、故長田新先生の指導の下に初めて全訳されたものである。その後、この原稿は、四十年以上も筆者の書齋に眠ってきたということを知るに及んで、心の底に感動を覚えた。一、八〇〇枚の原稿であるという。

この「幼稚園教育学」を読んで、私はフレイベルがいまここで

語りかけているような気がして、フレーベルという人をあらためて見直した思いである。第一章 回顧と展望——新年にあたっての瞑想——の冒頭は、「人間は、古い年の終りと新しい年の初めにあたって、すでに目はやってくる年に向かっていながら、あらたに消え去ろうとしている自己の生涯の一部、すなわちいまや終ろうとしている年をかえりみずにはいられないものである」という文章からはじまる。そして教育が人間にあたえたものと拒否したものとについて、自分自身の内部に問うて後、あのフレーベルの有名な句「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか」が、突然（のように私には思われた）があらわれる。

すでに標語のようにすらなっているこの句が、どうしてここにあらわれるのか、あらためてその前後の思索と共に何度も読み直し、私はいろいろと考えさせられた。フレーベルが云うように、自分の過去に光をあててみると、「自分がなしたことやゆるがせにしたこと、得たものや失ったもの……：自分に協力し自分を助けたことやらや、自分を妨害し自分のじゃまをしたことやらなど」が心に浮んでくる。フレーベルもこの時期までに、自分がたずさわった学園のことで、喜びのみならず、いくつも苦い思いをしている。それらの考察の結果、彼は教育は単なる事業ではなく、人間の本质に根ざした行為であることを認識し、その本質を

自分にも子どもにも実現するところに学園の意義を見出している。そして過去の挫折にもかかわらず、新しい年への希望を見出し、力にみだされる。そこで考え至るのは、彼にとっても容易ではなかったに違いない。そしてその次に、胸の奥から、「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか！」という呼びかけが出てくる。

これは単に戸外に出て子どもらと遊ぼうということだけではない。すぐ次に「子どもでなかったどんな人間もない」と云うように、子どもは、自己の内にある子どもでもあり、人間の本质でもあり、そして現実の子どもでもある。ここにはわれわれ自身よりよい自己に生きるという課題がふくまれている。子どもによって、お互いの人間の本质がよびまされるところに、教育の仕事の独自性がある。そこで、過去を顧み、将来を望み見る境目に人が立たされるとき、「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか」というこの呼びかけは、「真実の生命の叫び」であるというフレーベルの言はよく理解できる。

フレーベルの書をよむとき、私はそのあまりにも真摯な態度に圧倒されることがしばしばある。しかし、教育を、普通の事業や、普通の組織体と同じようにしか考えず、管理経営や経済の面からしか見ない人々の多い現代に身をおいて苦勞している幼児教

育関係者には、フレーベルのこのことばは大きな力になる。

私の観点からの主観的な読み方で、当を得ていない点もあるかもしれないが、フレーベルの人間が赤裸々に出ているこの「幼稚園教育学」は、理論上の批判をこえて、幼児教育者の力となりつづけることはたしかである。このような完訳を得たことは、消えることのない味方を得た思いである。

第二章は、創造的な活動衝動をはぐくむ学園の計画という主題で、彼の幼児教育の学園の具体的な目的や計画がのべられる。彼の深遠な哲学は、学園の建設という具体的な事業にむけられていることがここではっきりとわかる。このことは、第五巻に収められている第二十三章から第三十章に、さらに明瞭に示されている。第二十三章、一八四〇年六月二十八日——ブランケンブルクとカイルハウの幼児と青少年のための学園における四重の祝祭日という章では、学園の子どものための誕生日の祝い、グーテンベルク祭、聖ヨハネ祭りと一緒に、この日にドイツ・キンダーガルテンの創立祝いが行われた具体的な一日の記録が詳しくのせられている。早朝に山の上に行列を作って登ってゆく。七歳の少年から十七、八歳の最年長の生徒まで二列をつくって、列のうしろには教師が、そして小さい娘たちや大きい娘たちがつづく。山頂につ

くとフレーベルの声がきこえる。太陽が雲層からあらわれ、「幼稚園創立はまず最初に妨げとなる雲と戦わなければならない」全員で四部合唱の讃歌がうたわれ、フレーベルの挨拶がある。そして皆で朝食をとり、十時から礼拝がなされる。午後からブランケンブルクへと移動する。途中、車の台板がこわれるという突発事故などの報告もさしはさまれて、町のホールで行われたグーテンベルク祭と学園創立記念祭の報告がこまかに描かれる。読んでみると、自分がこれに参加しているような気がしてくる。グーテンベルク祭につづいてフレーベルの演説がある。その中でキンダーガルテンの設立を宣言し、署名による出資申込みを訴える。そのあとベーターベンのフィデリオからのアリアが歌われ、子どもたちが輪をつくって遊戯をする。そして夕方になって一同でささやかな食事をとって解散する。朝からの長い一日、どんなにか疲れたらうなどと思ってしまうほどその報告はくわしい。第二十四章には一八四〇年の幼稚園創設計画書、一八四三年の弁明書、第二十五章には教育組合の結成のための呼びかけ、付、このような教育組合の定款の一例、として規定の条項までのせられている。

私が、フレーベルの「幼稚園教育学」について、はじめて書いたのは、終戦直後に東大で学んでいたとき、唯一の幼児教育の授業であった岡部弥太郎先生のゼミでのことだったと思う。たしか、フレーベルの幼稚園の具体的なことはよくわかっていないが、「幼稚園教育学」という書物を見るとわかるだろう。ただし訳は出ていないというはなしであった。私はこれを読んでみたいと思ひ、神田の古本屋を探して歩いたが見つかるはずもなく、その代りに、「人間教育」の原書の一九一三年チンメルマン編のものを見付けて帰ってきた。それはいまもだいにしている。けれども、そのドイツ語があまりに難解で、それは読まなのままに本棚に並べてある原書のひとつである。そのフレーベルの著書の完訳をなしとげられた、地味な学者の努力に、敬意を表せずにはいられない。考えてみると三十数年前に岡部弥太郎先生のゼミで、「幼稚園教育学」の書物のことをきいたとき、すでに荘司雅子氏の書齋には、その訳が完了してあったのである。

つい、部分的な感想に紙数をつかってしまったが、こうして前

後関係を照し合わせながら、フレーベルの文章を考えることをさせてくれるのは、正確でよみ易い完訳のおかげである。この全集の完成のおかげで、フレーベル研究が進むのみでなく、日本の幼児教育の土台石が一つ置かれた感がする。

フレーベル生誕二百年の最大の記念塔である。

*

フレーベル全集邦訳全五卷

第一卷 教育の弁明

第二卷 人の教育

第三卷 教育論文集

第四卷 幼稚園教育学

第五卷 続幼稚園教育学

母の歌と愛撫の歌

玉川大学出版部

歴史人口学からみた生と死 十二（最終回）

鬼頭 宏

十 歴史と現代

(一)

一年間続けさせていただいた連載も、いよいよ最終回になった。今回は、出生から死にいたるまでの人口現象にかかわることわざをみることによって、幕を閉じることしよう。ことわざは、長い時間をかけて形づくられた庶民の知恵の結晶である。いま言い慣わしていることわざの大部分は、いつ、だれによって生

み出されたかは定かでないが、江戸時代、あるいはそれ以前までさかのぼると思われる。社会が大きく変動した第二次大戦の直後まで、その多くは実感のこもった、生き生きしたことばであったろう。この連載でとりあげた江戸時代の人々が、出生、結婚、死をどのように見つめていたのかを、ことわざを通して考えることにしたい（折井英治編『暮らしの中のことわざ辞典』第二版集英社に依拠した）。

万の倉より子は宝

現代には、子どもの将来に不安を抱き、出産を控える若い夫婦

が増えてきたが、かつては子を望まぬ親はまずなかつた。「千の倉より子は宝」「子に過ぎたる宝なし」「持つべきものは子」「子供とふぐりは荷にならぬ」と、子を持つべきこと、子を持つことの幸せを説くことわざは数多い。

現代日本人の理想の子ども数は、二人ないし三人に集中しているが、ことわざの世界ではどうだろうか。「子三人子宝」「三人子持は笑うて暮す」「多し少し子三人」「足らず余らず子三人」「負わず借らずに子三人」「死なぬ子三人皆孝行」は理想であつた。

乳児死亡率が高かつた江戸時代には、「滅らぬものなら金百兩、死なぬものなら子は一人」「思うようなら子と三人」と願つても、「死んだ子の年勘定」の悲しみを味わわないようにするために、平均五、六回の出産はどうしても必要だつた。「一姫二太郎」のことわざも、生まれる子ははじめが女で次が男が育てやすいとの経験から生まれたものだろう。

世の中はうまくいかない。「子煩惱に子なし」「長者に子無し」かと思つと、一方には「貧乏人の子沢山」「律義者の子沢山」「十を頭に十一人」という多産の夫婦もある。「無い子では泣かれぬ」とはいうものの、「有つても苦勞、無くても苦勞」。「無い子では泣かで有る子で泣く」「子がなくて泣くは辛掘りばかり」ということにもなつて、「子は三界の首枷」と厄介もの扱ひまでされて

しまふ。

なにしろ胎内にいるうちから「子持二人扶持」「子持ちの腹には宿無しが居る」のだし、生まれてくれば「乳を飲むこと百八十石」で、まさに「子宝脛が細る」思いをし、「子を持って七十五度泣く」ことになる。泣かされるのは経済的にばかりではない。

「太閤様でも子守は嫌」だそうだ。「泣く子は育つ」「赤子は泣き泣き育つ」あるいは「泣く子は利口」というけれど、「寝る子は育つ親助け」「寝る子は息災」というのが実感だろう。

それでも「我が子自慢は親の常」、「老いての幸い」を夢見て「這えば立て、立てば歩めの親心」である。「子にひかるる親心」だから「子故の闇に迷う」こともある。「馬鹿を見たくば親を見よ」とさえ言われかねない。「下手な子を持ちゃ火事よりこわい」のはわかつていても、「馬鹿でも総領、欠けても大腕」「馬鹿な子ほど可愛い」のである。「子を棄てる數はあるが、身を棄てる藪はない」のが人情なら、「棄てるも軒の下」もまた人情である。

幼い子を可愛がるのは、父母以上に祖父母である。「子より孫が可愛」「孫の可愛いのと向う臍の痛いのはこらえられぬ」という。それこそ「憎い嫁から可愛い孫が生まれる」心境で「馬鹿の孫ほめ」になつてしまふけれど、「孫飼わんより犬の子飼え」のことわざもある。念のため。

泣いて育てて笑うてかかれ

生まれた子の人格が幼いころにつくられることを、「三つ子の魂百まで」「七夜（または産屋）の風邪は一生つく」などのことわざが説いている。「子供は大人の父親」「子を見ること親に如かず」とさえいわれるから、親たるもの子育てには細心の注意を払い「泣いて育てて笑うてかかれ」「子供は教え殺せ、馬は飼ひ殺せ」の姿勢でなくてはならない。

「親と子供は銭かねで買われぬ」大切な存在ではあるが、親は子を、子は親を選ぶことは許されない。「大名の一人子」「長者の子は節句知らず」と、生まれた時から何不自由なく育てられる子もいれば、「子供は貧乏人の財産」「餓鬼も人教」とばかりに頼りにされたり、なぐさめられる親もある。また「一人子は国（世）に憚かる」とか「後家育ちは三百安い」「祖母育ちは銭が安い」「年寄の子は影なし」といわれても、子どもに責任はない。子をとりにまく環境はさまざまだが、「親はなくとも子は育つ」「生みの親より育ての親」で、どんな子も「三年たてば三つになる」のである。

わが国では長いあいだ、子どもは可愛いものの代表であった。乳幼児期の生存が不確かだったこともあって「七つまでは神のうち

ち」というふうに、子どもをみる習慣が生まれたのだろう。しかし七歳にいたると「七つ七里に憎まれる」存在になり、「八つ子も疳癪」とばかりに、ようやくそれ相応の存在が認められるようになる。

出産期から養育期へとライフ・サイクルのステージが進む頃、親の苦勞はいっそう大きくなる。経済的にも「惣領の十五は貧乏の峠（世盛り）」「総領子の十五の時は囲炉裏の灰も溜らない」ほどである。さらに思春期を迎えた「ニキビ男と雀斑女」は「破物と小娘」のたとえのように扱いにくいことの上ない。当人たちはもちろん、親にとっても「二・八余り（すなわち十六、七歳）は人の瀬越し」なのである。せっかくここまで育てても、「親の心、子知らず」「子で子にならぬ杜鵑」では、「憎まれたっ子世にはばかる（出る）」「憎まれたっ子頭堅し」となぐさめられても、親の立つ瀬はないといふべきだろう。

(二)

縁は異なもの

子女が成長して「鬼も十八、番茶も出花」「南瓜女も一盛り」ともなると、結婚が間近な問題となってくる。男でも「二十五が

済みや入日に向かう」というし、「二人口には過ぎるが一人口は過ごせない」というから、早いうちに相手を見つけてなければならぬ。「出雲の神の縁結び」「合縁奇縁」ではあるけれど、現代とは異なつて、本人さえよければよしというわけにはいかない。結婚は労働力の交換とか子孫の維持など、個人よりも家にとつて重大な意味をもつていたからである。

「縁あれば千里」「東男に京女」などの言いまわしはあつても、農民の現実の婚姻圏が案外狭かつたのは、互いの家の協力のためにはよく知り合つた間柄であることが必要だつたためである。だから「長者の娘も乞うて見よ」とか「恋に上下の隔て無し」は、勵ましにはなつても現実的ではなかつた。長い結婚生活を考えれば、やはり身分、家柄を見きわめて「婿は座敷から貰え、嫁は庭から貰え」を守るべきなのである。「庭」のほかには台所、灰小屋、流し下、掃溜など表現は多様であるが、妻の家よりも夫の方が優位であつた方がうまくいくと考えられていたのだらう。

結婚への道は本人にとつても親にとつてもなかなかかわしい。「娘一人に婿八人」ともなると、「一人娘と春の日はくれそうでくれぬ」ことになる。そうなつたら「一押二金三男」しかない。

もつとも娘を嫁がせる側にも事情があるから、なるべく有利に事を運ぼうとする。養蚕などで女子労働力需要が大きい地方では

「娘三人は一身代」であつたが、なにしろ「小袋と小娘は思つたより入りが多い」のたとえどおり、「娘三人持てば身代潰す」「娘の子は強盗八人」、あげ句のはてには「盗人も五女の家には入らない」とさえいわれるほどである。好ましい嫁ぎ先を見つけても「娘出世、親貧乏」になりかねなかつた。反対に、「婿三代続けば金持ちになる」「婿取り三代身上」と言う。もつとも、「婿取り天上無し」だそうだから、男たるもの「粉糠三合あつたら婿に行くな」といましめられた。

夫婦の年齢差についてもよしあしがある。「七つ泣き別れ」と七歳違ひは好まれなかつた。現代の夫婦は三歳差が平均だが、江戸時代にはもつと大きかつたようである。好まれたのは一歳違ひで「一つ劣りは鉄の草鞋で探せ」とまでいわれる。また「姉女房は身代の薬」「一つ増しは果報持ち」「篋増しは果報持ち」など、姉さん女房がよいとすることわざも多い。ただし、男女の平均余命が接近していた江戸時代には、現代とは異なつて、夫よりも妻が先立つ可能性を高めることになる。

女房は家の大黒柱

夫にとつて妻は偉大である。「家に無くてならぬものは上り櫃と女房」であり、「女房は家の固め」「男は妻(め)から」だつた

から、まさに「女房は半身上」。それゆえに「女房の悪いは六十年（百年）の不作」と言われ、結婚にあたっては「嫁を貰えば親を貰え」「娘を見るより母を見よ」と、よくよく相手を選ばなければならぬ。

こうして「似合う夫婦は鍋の蓋」「似た者夫婦」が誕生し、いつまでも「女房十八、われ二十」の気持ちでいられば幸せというものである。ところが「女房と米の飯には飽かぬ」とか「女房と味噌は古いほどよい」とは口先ばかりのようで、新鮮な気分であられるのも「女房百日、馬二十日」ならまだしも、「牛馬三十日、嬬二十日」となると少々ひどい。いずれにしても「女房と畳は新しい方がよい」「女房と茄子は若い方がよい」が夫の本音らしい。

「子はかすがい」「縁の切れ目は子でつなぐ」と互いにかまんでいても、もともと「夫婦は合せ離れもの」「均合わぬは不縁の基」で、「縁と命は繋がれぬ」「のけば他人」になつてしまふ。

離死別後の妻は強かつたのだろうか、「女房は一人でも食える」「女やもめに花が咲く」などという。「二十（十八）後家は立つが、三十（四十）後家は立たぬ」ともいわれるが、事實は逆で、三〇歳以上で離死別した女性の再婚率が三〇前よりずっと低下す

ることは、すでに見たとおりである。一方、「女房と米の飯は行く先にあり」と強がっていた男の方は、「女房は変える程悪くなる」のが実情のようだ。

(三)

嫁と姑、犬と猿

跡取りの結婚によって世帯の構成が変化すると、家族関係に微妙なきしみが生じる。嫁と姑の關係はそのさいたるものだろう。嫁いできた当初こそ、珍しがられ、大事に扱われようが、

「嫁の三日ぼめ」「嫁と姑七十五日」なのである。「八月柴は嫁に焚かすな」とかばつてくれることもあるが、そのようなことは例外で、むしろ「夏の火は嫁に焚かせ」とばかりに、きつい仕事は嫁へと回つてくる。里帰りとなれば「嫁の朝立ち、娘の夕立ち」がいつわらざる心情だろう。「兄弟は他人の始まり」だから、ましてや嫁にとつて「小姑は鬼千匹」、さらに「姑無ければ村姑」だったからまったく気が抜けない。

しかし年が経ち、主婦権が嫁に移る頃には、力関係が入れ替わつてしまう。「姑の場塞り」「麦と姑は踏むがよい」と年老いた姑は出る幕がない。跡取りに嫁が来れば「昨日は嫁、今日は姑」

「娘が姑になる」わけで、「姑に似た嫁」は「姑の仇を嫁が討つ」ことになる。「姑の十七見た者がない」のだから仕方がない。現代老人の悲劇には、核家族化によってそれをできなくなった点を加えられるべきだろう。

代が変われば世が変わる

六〇歳を過ぎる頃、世帯主の交代が行なわれる。跡取りは三十代、まさに「三十は男の花」である。結婚して子も生まれ、「妻(め)いとしの子いとし」で親の影も薄れがち。「子を持って知る親の恩」といっても、結婚後十年ほど経ってそれがわかってくる頃には親はすでにない。まさに「孝行のしたい時分に親はなし」である。

「三十九じゃもの、花じゃもの」「人の意見は四十まで」と、代変わりとともに人生の盛りが訪れるが、「人生僅か五十年」「人生一生二万日」の時代、出生時の余命はもつと短かかったのだから老化も早い。「四十がったり」「四十くらがり」と体力も衰えをみせる。

「年が薬」「年取れば利口になる」「年寄は家の宝」「年寄の言うことと牛のしりがいは外れない」とおだてられても、実は「年寄と古籠は使い得」とばかりに、たいしてあてにされていないわけ

ではない。むしろ「年寄の言うことと牛の尻かせに直いのはない」と皮肉られ、「年寄と仏壇は置きとこがなない」「年寄と釘頭は引つ込むがよし」と敬遠されるばかりである。「長生きは恥多し」「年には勝てぬ」「年は寄るまいもの」と弱音を吐き、嘆いたところではじまらない。「老いて再び稚児になる」「七十の三つ子」というから、いっそ「老いては子に従え」を守るほうがよきそうだ。

老人が居つらいのは、どうも高齢化社会の現代ばかりとは言えないようである。「どうせ生ある者は死あり」ならば、寝たきり老人になるよりは「死なば卒中」という悲しい願いにいたるのだろう。とは言っても、「命あつての物種」「命に過ぎる宝なし」だからこそ、「亀の年を鶴が羨む」のだし、その亀も「亀も上うえ」とばかりに長命をのぞむのである。それが人情というものだろう。

(四)

ことわざは、時にはいましめ、批判、あてこすりの痛烈な道具とされ、時にはやんわりと慰めや希望を与えてくれる。だから同じことに対して、肯定、否定の両方の立場から、矛盾する表現がいくらかでもでてくるのである。そのようなことわざを、江戸時代

人口史の事実をそくして配列してみたのだが、いかがだろうか。

さて、近年の出生率の低下は著しく、すでに保育園・幼稚園には園児の減少として影響が現われている。昨年は戦後、したがっておそらく史上最底の水準へと出生率は低下したが、今年になってから、産業界からも将来の労働力不足や経済活力の減退を心配して、出生力の向上をはかるべきだとの声があがるようになってきた。ほんの少し前と、まるで様変わりしたことに驚く外ない。

昭和四十九年は国連世界人口年だったが、石油危機直後のこの年に出た『日本人の動向』（人口白書）でも、同年の「第一回日本人人口会議」の大会宣言においても、「子どもは二人まで」の国民的合意を実現して、なるべく早く「静止人口（人口ゼロ成長）」をめざせとの提案が出されているのである。

出生率の増減は循環的に変化するという説もあり、現に、毎日新聞社人口問題調査会が今年五月に実施した「第十六回全国家族計画世論調査」の結果でも、理想子ども数の三人志向が増えて、少産傾向に歯止めがかかったとされる（毎日新聞八月十二日朝刊）。また子育てや親の扶養などに関しても「価値観のUターン現象」が見られるとしている。

日本型の少産少死社会が実現しつつあるとみられないだろうか。まだ決定的な予測はできないものの、僅か数年の間に大きく

揺れ動く一部の声とは無関係に、日本の家族は着実に方向を見出しているのである。江戸時代後半は人口学的にひとつの均衡状態を達成した時代である。これからの日本社会も次元は異なるが、核家族化を達成し、人口成長率もゼロに近い、新しい均衡状態に入ることになる。その時を迎えようとしている今、一年にわたって紹介した江戸時代後半の人口史が、何らかのお役に立てば幸いである。

「了」
（上智大学）

*

〔著者紹介〕一九四七年三月二日、東京に生れる。中学校から大学院まで慶応で学ぶ。専門は、日本経済史、人口史の研究。中学時代、朝日新聞に連載された「柳翁十話」に魅され、大事に切り抜いた頃より民俗学に興味をもつ。経済学部に進んでも、速水ゼミに入り、一味ちがった専門を選ぶ。大学時代は、児童文化研究会に所属し、人形劇や影絵、子供会のサークル活動が続けた。ただ今、二男の父。

『幼児の教育』戦後篇復刻のお知らせ

既に好評のうちに刊行発売中である『復刻・幼児の教育』

第一期（第一巻～二〇巻）第二期（第二一巻～四四巻）の戦後版に引き続いて、戦後篇の復刻に着手することになりました。

『幼児の教育』は、幼児保育再生の努力の中で、昭和二十一年一〇月に復刊されました。生れ変わった同誌は、終戦直後から占領期における保育界の共同機関誌として、大きな役割を果たしました。戦後篇の誌面を彩る記事や論説は、現在に連なる戦後保育史上またとない資料と申せましょう。戦前版に優る愛読をお願い致します。

〔体裁・内容〕

全八巻（全七冊）、A5判、クロス装、外函入、

題字・東山魁夷

《第四五巻～五二巻》『幼児の教育』（昭和二十一年～昭和二十八年）

※原則として一年分を二冊に合本。（但し第四五巻は

第四六巻に含めて一冊とする）

※各巻平均 五七〇頁

○装幀・造本・製作等全て第一、二期に準じた完全復刻

○解題、年表、総目次、著者別索引を最終巻に収録する。

〔編纂〕 幼児の教育復刻刊行会

〔発行〕 名著刊行会

〔予定価格〕 六〇、〇〇〇円前後 分割払い可能

〔申込・問い合わせ先〕 一般書店では扱ってお
りませんので、必ず左記へ〕

総発売元・株式会社コーディック（童話舎）

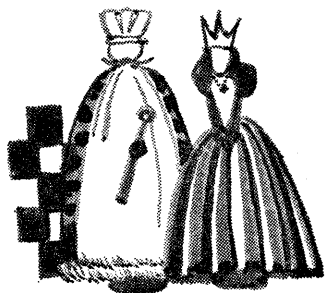
東京事務所 千代田区神田神保町三ノ二五 精和ビル

TEL 東京（〇三）二三四―四八〇一

本社 大阪市西区北堀江三―六―二三

TEL 大阪（〇六）五三一―九八〇一

エリクソンと幼児教育 (5)



仁科 弥生

三、移動と性器期(その二)

前回で述べたように、心理社会的発達の第三段階の課題は自発性の獲得である。しかし子どもに自発性が発達してくると、周りの人々と競争したり衝突したりすることが多くなり、それが子どもに罪悪感や不安を引き起こす原因となる。たとえば、子どもは、やましいことをして見つかったときに恥かしかるだけでなく、見つけられはしないかという恐れを抱くようになる。さらには単に想像しただけの考えや行為についてさえも罪の意識を感じるようになるのである。実はこれが個人的な意味での道徳性の礎石となるものである。また先にも触れたが、子どもは男女の性差についても強い好奇心を示すようになり、やがて身につけなければならない未来の役割について理解しはじめ。今回は、このような子どもの性役割意識の獲得や道徳性の発達の問題を中心に、エリクソンの考え方をたずねてみよう。

精神分析理論は、子どもがどちらかの性の親の方によりよく似た行動をとるようになる過程や、親のもつ価値観や道徳的規範が子どもに内在化される過程は、同性の親との強い同一化によると指摘している。この過程に関与する動機については、親の愛情が

失われることへの恐れと、攻撃者としての親に対する恐れとが仮定されている。ジェイユブソンによると、愛情喪失の恐怖は、子どもと親との最初期の依存関係に基づいており、子どもは親との肯定的な関係を持続させようとして親を模倣し、親と同じように振舞おうとするのである。こうして理想的自己像や道徳的規準の内容が子どものパーソナリティの中に組み込まれていく。同時に、親のパーソナリティの諸側面を自己概念の中に取り込むことによって子どもの親との結合感情が強まり、それが子どもに基本的な安全感を与えることになり、やがて逆説的ながら親から独立して、子どもは内在化された規準によって自分の行動を自分で統制することができるようになっていくのである。攻撃者との同一視はA・フロイトによって理論づけられているが、それによると、この動機は、両親に対してある程度の恐れを体験したときに喚起されるものであるという。危害から身を守るために、子どもは恐れている対象と同じような行動をするのである。この場合、子どもの性的、かつ攻撃的衝動と、これらの衝動を行動的にあらわしたときに両親が示す態度との間の葛藤がその底流にあることはいうまでもない。

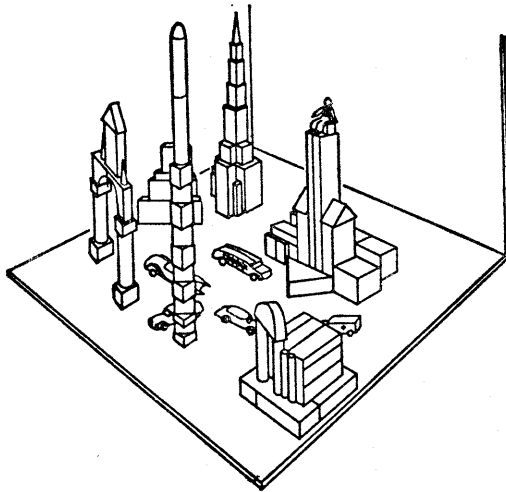
このように、道徳性の発達について、フロイトは、子どもの良心超自我が両親の超自我と同一化することによって形成され、そ

の良心が行動を動機づけたり、禁止したりする際に大きな役割を果たすことを仮定し、また幼児期という人生の初期に道徳性の発達の基盤があることを強調した点で貢獻が大きいとされている。しかし、フロイトが、子どもが包摂するのは親の超自我であると考えたことに対して、ニューマンらは、幼い子どもはその時の情緒状態に直接影響するような要素だけを受けとめる傾向があり、したがって親の道徳的価値が子どもの道徳的枠組の中にとり込まれる正確な過程については、フロイトの記述に疑問が残ると指摘している。ではエリクソンはどのような立場をとっているのだろうか。彼は『子どもが両親の超自我と同一化する』というエディプス段階に関しては、この両親の超自我がその時代の理想とできるだけ一致していることがきわめて重要であり、変化する文化的規範や制度を反映するのに両親が不適切であればあるほど、子どもの自我と超自我との葛藤は一層深刻なものになると述べている。そして道徳性を教えるメカニズムとしての親のしつけや児童訓練に注目し、道徳性の発達には両親を通しての働きかけによるが、社会そのものが及ぼす影響の大きい点をも強調して、その発達過程についての理論を展開させている。

次に、エリクソンのあげた例証を紹介しながら、その理論を考察してみよう。まず、男女の性役割意識の発達の問題から取りあ

げよう。エリクソンがカリフォルニア大学児童福祉研究所での正
 常児を対象にした発達研究に参加して行なった遊びの場面にみら
 れた子ども空間的行動に関する研究は有名である。それは十歳
 から十二歳の正常な男女児童を一人ずつ部屋に招き、テールは
 映画のスタジオで、玩具は俳優や舞台装置であると説明して、テ
 ールの上に映画の面白い場面を構成してもらって、その結果を
 考察したものである。一年半以上にわたって、約一五〇名の児童
 が一人三回、約四五〇の場面を作った。それらの遊びの中に表現
 された主題は、それぞれの子どもの生活史の力学と密接に関連し
 ており、「独特の要素」と呼ばれるにふさわしいものであったと
 いう。たとえば男子の中でただ一人、家具を円形に並べて部屋を
 作った少年がいた。部屋の内部というのは実は女の子が好んで構
 成した形態の一つであった。その少年は、当時、甲状腺の病気で、
 肥って柔弱な体格をしていた。ところが一年後に、治療の効
 果があらわれて痩せてくると、一番高く、一番細長い塔を作っ
 たのであった。これは「独特」の要素の一例であるが、同時に、
 それはその個人のもつ身体的な自己についての意識がこれら構造
 物の空間的形態に影響を与えていることを暗示するものであっ
 た。この結果から、エリクソンは、もし遊びに表現された形態に
 男子に共通する形態と、女子に共通する形態とがあったとすれ

図 1



ば、それらは男性または女性であるという意識の片鱗を表現する
 ものであると仮定することができると結論した。そして、事実、
 構成された形態は勿論、使用された積木の数も男子と女子とでは
 異なっていたのである。そこで、エリクソンはそれらを男女それ
 ぞれの性に「共通」する要素と呼び、そして、これら形態を、た
 とえば塔、建物、街路、凝った囲い、単純な囲い、壁のある室
 内、壁のない室内などの用語で定義した。次にこれらの遊びの場

面の写真を二名の観察者（エリクソンの仮説については何も知らない）に示して、そのような形態の有無の判定についてまず彼らの一致度を調べた上で、彼らに男子の作品と女子の作品にこれらの形態があらわれた頻度を測定させたのである。それによると、男子は建物、橋、塔、街路などを作る傾向があり（図1参照）、一方、女子は実験用のテーブルを家の内部として使い、積木は単純な用途に用いるか、或は殆ど使わない傾向を示したという（図

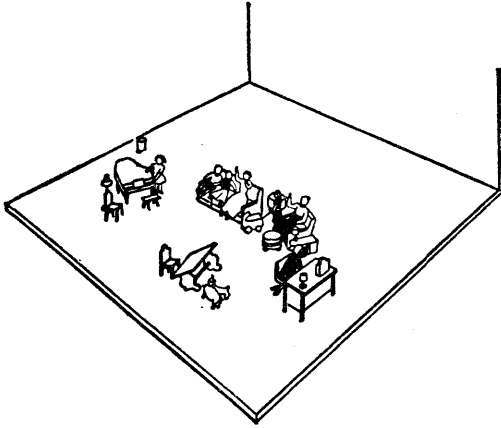


図 2

2参照)。したがって高い構築物が男子の形態に多かったことになる。しかしこの上昇傾向の反対、たとえば高い塔の倒壊、人形の墜落など下降傾向も同様に男子に典型的であった。これらはさまざまな形をとっていたが、すべて高低という変数が男らしさの変数であることを示していた。そして「高い」と「低い」が男性の変数であるとすれば、「開いた」と「閉じた」状態が女子に特有の形態であった。壁のない家の内部を大多数の女子が作った。そして多くの場合、その室内は平和そのものであった。しかし、いくつかの場面では、豚が闖入してきたり、虎が押入ってきたりなど、何か一騒動が持ち上がった。そして、このように脅かされるのはたいてい女性であるが、押入ってくるのは常に男性の人や動物であった。しかし不思議なことに人や動物が侵入してくるという着想は防衛のために壁を作るとか、入口を閉めるという行為には結びつかなかった。むしろこれらの侵入事件はユーモアと楽しい興奮を伴っていたという。これらの遊戯空間の利用に関するもっとも有意な性差をまとめると次のようになるという。男子の場合、著しい変数は、高さ、落下、激しい移動（自動車や動物やインディアンなどの列の）、または警官によるその流れの停止（図3参照）であった。女子の場合、それは静的な室内で、それらは単純な囲いで囲まれ、開放的であり、平穏であるか、或は外

图 3

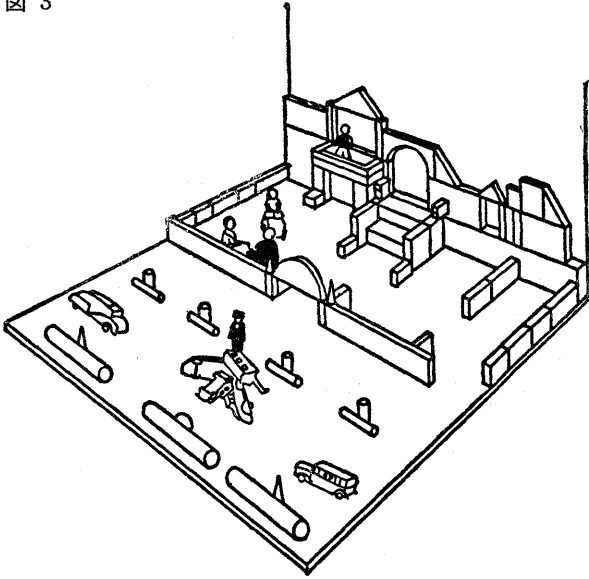
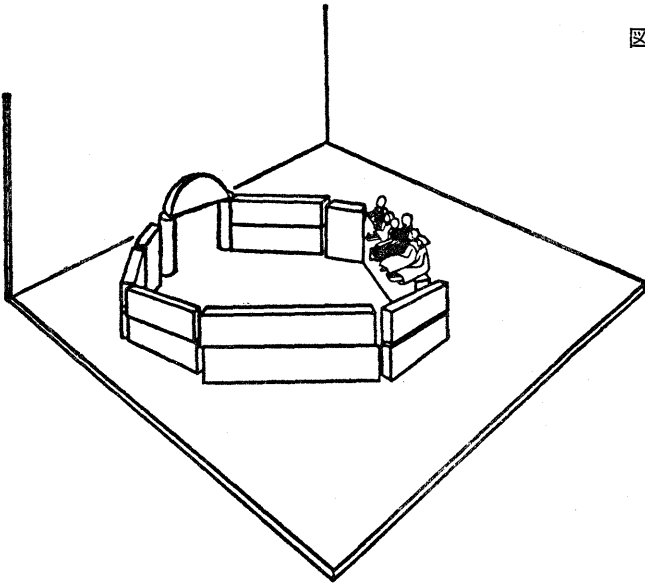


图 4



部からの侵入を受ける。男子は高い構築物に凝り、女子は門を飾りたてた（図4参照）。

これらの作品にみられる子どもたちの空間に対する感覚的傾向は、すでに触れたエリクソンが主張する器官様式をわれわれに思い出させるのである。ちなみに、この点について言及したエリクソンの言葉を引用しておこう。「それらが性的器官の形態にきわめて近似していることは、これまでにすでに明白である。すなわち、男性では、生殖器は外部的器官で、勃起性があり、侵入的である特性をもち、非常に動的な精子細胞をコントロールする。女性の場合は、それは内的器官で、静的に待機している卵子に通じる前庭的入口をもつ。」そして、彼は、臨床的判断として、性器様式が空間構成の形態を支配する様相は、男女には空間に対する感覚に深い相違があることを反映するものであると述べている。また、解剖学的構造と心理との間にみられるこの関係は、ちょうど男女の性的区別が人体の基礎計画にもっとも決定的な相違をもたららし、それが次に男女の生物学的経験や社会的役割をも決定するという関係と同じであると考えている。

エリクソンはさらに、これらの遊びの構造はさまざまな社会的含みの空間的表現であるとみなすこともできると分析している。すなわち、男子の外部や上方へ向う動きを表現する傾向は、自分

が強く、攻撃的になり、また社会に出て独立的な人間として活動し、「高い地位」に到達するということを示す一般的な義務感の表現であるかもしれないのである。女子の場合の室内の表現は、家庭を管理し、子どもを育てるという予期された仕事に専念していることを意味するともいえるのである。つまり、彼らは社会ごとに男女の性別に応じて期待されている役割を演じているだけかもしれないのである。したがって、それらは社会の性役割規範にそって両親が行なう意図的なしつけの結果であると解釈することもできるのである。

しかしながら、その解釈だけではまだ疑問が残るとエリクソンはいう。なぜなら、少年たちがこれらの場面を作りながら、主として自分たちの現在の、或は予期される未来の社会的性役割について考えていたとするならば、男の子の人形がもっとも頻繁に使われたはずであるが、実際には、もっとも好まれたのは警官の人形であったからである。しかも、この少年たちの中で、将来、警官になることを夢みている少年はごく少数であり、また彼らが警官になることを大人が期待していると思っている少年も少なかつたであろうと想像できるのである。事実、この研究が始められたころに第二次世界大戦が勃発しており、飛行士になることが多くの少年のもっとも熱烈な望みの一つであった。しかしこの遊びの

中では、飛行士は修道僧や赤坊よりは好まれたという程度であったという。ところが警官の人形は、このアメリカ西部の子どもの理想であったカウボーイの二倍の頻度で遊びにあらわれていたのである。また、女子にきわだって多かった室内の表現について、エリクソンは、それを、女子の主要な動機づけが現在の家族を愛することであり、未来の家庭を期待することであるために、彼女たちは男子と共有したかもしれないあらゆる望みを退けてしまった結果であると解釈したとしても、それでは、女子が家の回りに壁をあまり作らず、たとえ作ったとしても低い壁であったことの説明にはならないという。家庭生活に対する愛情からは、むしろ親密さや安全を保証するものとして高い壁や閉じられた入口が多いという結果が予想されるからである。そればかりではない。この平穩な家庭の情景の中で、女の子の人形の多くはピアノを弾いているか、或は居間で家族と一緒に平和に団欒していた。この場面が、面白い映画の場面を作るようにといわれて、彼女たちがしたいと望んだことを、或はしたいと装うべきだと考えたことを本当に表現していると、誰がみなすことができるだろうか。そこには性役割獲得の過程の複雑さや、強化による学習の効果についてのあいまいさなどが暗示されているが、同時に、子どもの性役割の形成は強化の働きだけによるのではないこと、つまり別の要因

によっても規定されていることが示唆されていると思うのである。これに関して、エリクソン自身は、女子の作品の中の平穩な室内の表現にとって、ピアノを弾く少女が特別の意味をもっていと解釈している。そして同じように、男子の作る大通りの場面にとって警官に停止させられた交通が特別の意味をもつと想定し、前者は内でのやさしさをあらわすと理解し、後者は外での慎重さをあらわすと理解している。そして『面白い映画の場面』を作るようにという明快な指示に答えて、このようにやさしさと慎重さが強調されていることは、単に文化的、意識的な理想に従っているという理論では説明できないきわめて動的な問題の広がりとして激しい葛藤がこれらの諸反応の中に表現されていることを暗示する」と述べている。これは、性役割の発達を親や文化からの他律的規定性のみならず、子どもの自我の自発的、能動的営みとしても進められる過程として見事にとらえたエリクソンならではの分析である。男の子と女の子は器官や能力や役割などの相違ばかりでなく、経験の独自性によっても区別されるのである。それは個人がもち、感じ、予期するすべてを自我が統合する結果である。ちなみに、エリクソンは自我を、人間の経験や活動を環境へ適応するための行動に統合していく積極的な能力としてとらえている。したがって、男女の性別を互いの違い方によって特色づけ

るだけではけっして十分ではないのである。そしてさらに彼は、文化は、われわれの生物学的に定められたものに磨きをかけ、男女間の機能の分割のために努力しているが、その分割は身体の解剖学的構造に対しても適切であると同時に、特定の社会にとっても有意義であり、かつ個人の自我にとっても統制が可能なものではなくてはならないとも主張している。

以上、エリクソンの子どもの遊びにみられた空間的行動に関する研究を紹介した。その構成された空間と表現された主題にみられた性差の分析は、生物学的要因、文化・社会的要因、心理学的要因の相互浸透の様相を明確にとらえていた。今日、学際的アプローチのむつかしさが取ざたされていることを思うとき、生物学的、社会的、心理学的アプローチが一人の研究者の業績の中にこのように見事に結実したことは瞠目に価するといえよう。だが何といたってこの研究の異色なのは、それら子どもの作品にみられた器官様式の証拠によって、われわれの行動が身体の基礎計画の中でしっかりと支えられているという事実を明らかにしている点であり、子どもの遊びの観察でその事実をこれほど鮮やかに示した研究は少ないのではなからうか。そこに、人間を常に身体的、社会的、心理的作用の中で生きる存在としてとらえる精神分析医としてのエリクソンの視点をわれわれははっきり読みとるこ

とができるのである。

(津田塾大学)

参考文献

- 1 Erikson, E.H., *Childhood and Society*, 1963, 1st ed., 1950. (仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房一九七七)
- 2 Erikson, E.H., "Identity and the life Cycle: Selected Papers," *Psychol. Issues* (Monogr.), Vol. 1, No. 1, 1959. (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房一九七三)
- 3 Evans, R.I. 『エリクソンとの対話』陶堂、中國訳 北望社一九七一
- 4 Freud, A., *The Ego and Mechanisms of Defense*, 1936. (外林大作訳『自我と防衛』誠信書房)
- 5 Freud, S., "Three essays on the theory of sexuality," 1905. (懸田克躬訳「性に関する三つの論文」フロイド選集 5 性欲論 日本教文社)
- 6 Jacobson, E., *The Self and the Object World*. New York: International Universities Press, 1964
- 7 Newman, B.M., and Newman, P.R., 『生涯発達心理学』福富伊藤訳 川島書店一九八〇
- 8 高橋、小嶋、古沢編『家族の発達』同文書院一九七五

子どもとの出会いの中で学ぶこと ⑦

水沼昭子

園庭の一隅に数本の松がある。一学期にはほとんど子供達の視野に入らない松。二学期も運動会が終る頃、毎年のように、この松に年長の子供達が登りはじめる。木登りは二学期と決めたのではないのに、きまつて運動会が終ると、一人、二人、と松に登りはじめるから不思議である。

そういえば、一学期は皆、集団生活の中で自分の場や、遊び、仲間をみつけるのに夢中で、その動きも砂をいじり続けたり、固定遊具で遊んだり、自分の手の届くところ、自分の今持っている力の及ぶ範囲で園生活を過していく。一見安定してみえる一学期の中で、子供達は満足感や征服感を味わう一方で、思いがけない失敗、アクシデントに遇ったりしてすごす。そうした後の二学期、自分の過して行く時の前後が少しずつわかり、仲間と出会って生活が広がって来た頃、彼らの前に松の木が見えはじめてくる。そんな気がしている。

この松は、なんとなく「さあ、登ってこい」と呼びかけているような姿をしている。根元から二、三メートルは登りやすいカーブが続き、そのすぐ先が一寸、ひと休み出来そうに

安定した枝になり、あとは左右に小枝を広げながらのびている。そんな松が三本かたまつてある。

登園後すぐに、三人の年長組の男の子が木登りに挑戦しはじめる。はじめは一人一人が「僕が先だ」の「お前はまだ」だと幹のまわりで騒ぐ。三本の木の内、子供達にとつて登りやすい木があるらしい。騒ぎが一段落すると、兎に角、それぞれ登りはじめるが思ったほど簡単には行かない。靴を脱ぎ、靴下を脱ぎ、素足になる。そうした工夫の中で三人共右往左往して結局、一人が登り、あとがお尻を押す係になる。けれど、登る者の力やリズムと、押し上げる者のそれが上手に合わない、これもむずかしい。自分達の背丈位のところで三人がキャア、キャアいいながら、まるでお団子のようにくっついている。ふとした弾みで登るきっかけをつかんで登りはじめる。押し上げる二人は大喜びで「大丈夫か」とか「気をつけろ」とか、いさましく声をかける。上の者はそうした声援など聞かえない様な固く緊張した表情で手や足を動かして行く。その内、例の安定した枝のカーブまで行き着く

と、枝に股がり背中をのぼす。その時、はじめて「ヒヤァ」「キヤァ」「キヤラメル・コォン」などと歓声をあげる。ドキドキした、うれしい気持とこわさの混った声である。下で遊ぶ子供達がその場に集まってくる。にぎやかな松の根元へと、歓声の主は緊張しながら、一手、一足を運び帰ってくる。「大丈夫だったの?」「やってみようか?」「平気?」ロ々に木登りへの評価をしながら、女の子も男の子もしばらくはこの遊びに取り組んで行く。

ちょうど、こうした時期に見学にみえた方から安全教育をどう考えているかと問われた事があった。決してその事を軽んじてはいないが、木登りはこうした方が良いなどと前もって伝えたりはしていない。せいぜい根元に石ころはないかみておく位、又は「せんせい、木登りしてくるよ」と伝える約束がある位である。子供達のどの遊びにも、余程の事が無い限り前もって、道すじを示そうとは考えていない私達の現場では、木登りも同様である。

日頃、子供達の行動をみていると、これからしようとする遊びや行動に、きちんと自分の力の「ものさし」をあてがっているように思う。彼らとはじめて出会った時から、園生活のいろいろな出来事の中で、その子の姿をとらえていると、「あの子なら大丈夫」「この子は少し助けよう」その呼吸と、子供達の「ものさし」とが合い通じる——そうした時期、二

学期に「木登り」がはじまる、その意味がなんとなくつかめるような気がする。

自分で判断して身を処すること。原始的できつと、はじめから持っているはずのこの力を、その芽をつんでしまわずにくりひろげる園生活、私達の安全教育はそうした事の中にあると問われたら答えるだろう。子供達にとって始めての集団生活のそのスタートから、その子の遊びや過し方のペースを認め、その中で出会う小さい危険をたくさん彼らなりに受けとめさせ、考えさせながら生活させて行く。私達は心をかたむけながら、手や口を出さずに居合わせる保育者でありたいと思う。

私も松に登ってみる。下で見守るよりもはるかにむずかしい。けれど、松の小さなくほみ、出っぱりが登る者をはげましてくれる。足をかける場や指をかける場として小さいくほみが無言の内に役わりを果す。登りきった気持は、まさに「キヤラメル・コォン」だ。二学期の中ば、この時期を選んで、自分に挑戦するかの様に木登りをはじめる年長の子供達の内面の充実を感じる。松の木の下で待つ子供達のところへ緊張しつつ手足を運んで降りながら私は新しい発見をした様に思う。

(千葉・愛隣幼稚園)

「伝記にみる人間形成物語」の

執筆を終えて



西平直喜

1 母親の影響力の大きさ

私はこの五月に、お母さん方に読んでいただきたいと二冊の本を世に問いました。「伝記にみる人間形成物語」の第一巻「幼い日々なきいた心の詩」、第二巻「子どもが世界に出会う日」(有斐閣刊)の二冊です。

青少年問題を追っているうちに、お母さんたちに、人間というものをじっくり考え、とりわけ人格がどのような育ってゆくものかを正しく理解して欲しいし、生き生

きと胸をはって生きていって欲しい、できることなら、日本全国の母親が腕を組んで立ちあがり、青少年育成の社会運動でもおこしてもらいたいくらいの気持になり、その手助けにと思いつながら、この本を書き進めたのです。これから紹介する内容は、すべてこんな想いが背景にあつて、その上に展開されていると思つていただきたいし、おひとりでも多くのお母さんに、人間が形づくられてゆく過程を知っていただきたいのです。余り「しつけ」とか「叱り方賞め方」という技術にとらわれずに、人間そのものをじっくり見つめていただきたいという考え

方ですから、心理学とともに哲学や宗教も入りこんできますし、夫婦のやりとりから遺伝と環境の問題まで扱います。「人間をその誕生から老衰まで、心や人格がどのように成長しどのように形成されていくか」を、伝記を材料にしながら物語っています。

このなかに「わるい母親以外はみんなよい母親である」といった節があり、当り前すぎて笑い出される方があるかもしれませんが、この表現のなかに、母親はなにも、よい母親になろうと気ばったり、ぜひこの子をA大学に入れようなどと力んだりせず、「暖く安らかで、のびやかでおだやかな」「ふっくらして自然で調和がとれた」「あるがままの柔軟な心をもった」女性だったら、赤ちゃんにはそれだけで十分な母親だと言いたいのです。

たとえば赤ちゃんをもつとき、この自然さを欠いたお母さんは、どこかで子どもを傷つけます。徳富蘆花や坂口安吾、ビリ・ホリディやバルザック、リルケやオスカー・ワイルドのお母さんは、「もう欲しくない」「まだ欲しくなかった」「今度は女の子が欲しかった」などの心の動揺が、育て方に微妙なかげりを与えました。まし

て、夫婦仲が悪い場合や、私生児だったとか養子にやったりとか環境の変化も影響しています。画家のダリ、舞踊家イサドラ・ダンカン、室生犀星、高見順、ストリンドベリ、モンローなど、ひとりひとりの心情は実に複雑です。

一方父親は、これまたいろいろの影響を与えますが、たとえば幼児期に子どもの手を引いて散歩した父親は、どんな影響を与えただろうか、石川啄木、ジョン・スチュアート・ミル、ボードレール、ヘルマン・ヘッセ、ジャンジャック・ルソーなどの伝記をさぐってみます。

更に少し変った散歩をしたキルケゴール父子、ルイス・キャロルやアンドレ・ペラン父子の例、そして夫婦仲が悪かったり、父子の間に葛藤があったりしたジイド、コンラート・ロレンツ、アーネスト・シートンの例もあげて分析します。そして、なによりも三歳から五歳の子どもは、父から良心の基礎になる「超自我」を与えられます。そしてその超自我の在り方によって、子どもの倫理的な行動の型が決まってゆくのです。フロイト自身や、哲学者サルトルなどの例からその意味を考えますが、最後に、父を二歳で亡くした福沢諭吉と、厳格な父

にスペルタ教育を受けた内村鑑三の比較をとおして、良心の性質を追求します。この節は、「子どもの良心の両親は、両親の良心である」と名づけられているのですが、これもじっくり味わっていたきたい言葉です。

そして最後に、家族は生きた交互作用のなかで全体的な動きをする——家族ゲシュタルトをもっているということの説明をしています。

「兄弟げんかとは兄と弟のけんかに非ず」と言います。兄と弟のけんかではなくて誰とのけんかなのか？ 実は必ずといってよいほど背後に母親への不満や憎しみが隠されているのです。徳富蘇峰・蘆花兄弟、フローベール兄弟、ジョルジュ・サンド姉妹、野口英世兄弟、内村鑑三兄弟から、シートン、ミル、ウィーナー兄弟まで、ことごとく、後ろに母親の偏愛や冷たさが見出されます。その反対に兄弟姉妹のこまやかな愛情を示した、グリム兄弟、吉田松陰、ウィンセント・ゴッホ兄弟、ロマン・罗兰兄妹、などは、みんな実に良い母親をもっていることがわかります。

しかしここでも、良い母親とか悪い母親とか単純に割り切れないのは当然です。というのは、子どもが抱く両

親の独占欲とか性愛的な愛情——エディプス・コンプレックスなどが、良い母親を憎ませたり、兄弟を嫉妬させたりするからです。この言葉を使い始めたフロイト自身も、ミルも、D・H・ロレンスもこのコンプレックスを表現しているのですが、従来は、母親の方が息子に愛着する傾向は余り重視されずにきました。しかし今は、むしろこの〈逆エディプス・コンプレックス〉と私が名づけた心情が、隠れた病原なのです。

今もおお絶えない嫁—姑の問題は、ほかならぬこの逆エディプス・コンプレックスによって悪化されてゆくものと言えるでしょう。「お母さん、あなたは息子さんが嫁をもらったとき、冷静でいられますか？ お嫁さんを中心に愛することができるとはいいませんか？」と問いかけます。

第一巻はほぼ幼児期までで終わります。次の児童期の間形成を扱ったのが、第二巻「子どもが世界に出会う日」なのです。

2 性質・性格・人格という考え方

小学校に入った子どもは、もうひとりひとりが独特の

個性をもっています。その個性が六年間の児童期に完全に身につけてゆきます。三つ子の魂と言いますが、ほほ五歳前後に、この個性の芽が育ち始めるようです。

ここに、ユーモアのセンスが発達した子どもをあけてみましょう。この子は、父親はアル中で後にはゆき倒れて死んでしまふようなあわれな人間です。母親は芸人で、細腕で二人の子どもを養い愛しますが、やがて心身ともに疲労困憊して精神に異常をきたすに至ります。自分も野良犬のようにやせて、字も読めないあわれな子ども——それが五歳のチャリー・チャプリンでした。

彼はたった一つ、両親が芸人だったおかげで、物ごころついたころは舞台上に登って子役を演じたりして、演技する能力だけを身につけています。あわれな母親をなくさめるために、懸命に笑わせようと努力する、この努力が、何年もつみ重なったとき、彼は他人を笑わせる才能を完全にマスターしてしまふ。つまり彼の演技は、あわれな母を慰めたいという子どもが抱いた願望によって育まれたのです。

これと同じことを、ガンジーは自伝の中で書きます。「あわれな母親を笑わせたいという強いねがいがあつ

た」。ラッセルやモームのように不幸な子どもは、その不幸と闘うためにユーモアの感覚を身につけ、ヒトラーやバーナード・ショーは自己嫌悪感をなだめるために、そして、大言語学者サミュエル・ジョンソンは躁鬱型という病的なはしゃぎのために、ユーモアのセンスに磨きがかかったのです。

三つ子の魂の例として、幼少年期を暗く不幸な悲惨なうちにすごす夏目金之助を分析します。彼の正義感が、どうしてあれほどよんだ環境のなかで育ちえたのか。まさにどろ沼に咲き出る蓮の花のような美しさです。これを、養子にやられた塩原家への抵抗——ぼくは塩原の子どもなんかじゃあないぞという自己確認（アイデンティティ）を中心に、母の愛、父の代償となった長兄の存在、などの諸要因によって説得します。

そして次にこの物語の中核になっているエリックソンの漸成理論という人間一生の発達図式を、可能なかぎり易しく説いてゆきます。この図式は今、世界の心理学者が注目しているものですが、専門家でさえ難しい、わかりにくいというものです。これを、伝記に例をとりながら説きあかそうと努めました。

第2章は、「性格はいつころどうしてできるのか、一度できあがった性格は変えられるものだろうか」という問題を、性格という語には、性質・性格・人格という三つの少しずつ違ったニュアンスをもつ言葉が含まれていることを説きながら、あいかわらず、伝記によって話を進めます。「恥かしがり」という性質を、哲学者ウィリヤム・ジェームズ、ピエール・キュリー、エンリコ・フェルミ、ユンク、ワシントン、原敬、寺田寅彦、ネール、エレノア・ルーズベルト、ヘルマン・ヘッセ、ショパン、チャイコフスキーなどの伝記から引いて、それがどのような性格となり人格として表現されるかを分析しています。

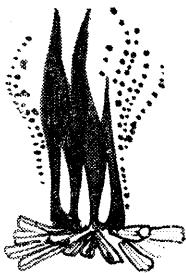
そしてここで、性格型(タイプ)の典型として、分裂型と躁鬱型、対人態度の「人に向って・人と対して・人から離れて」の三つの型などや、いつも死にたいという願望を秘めた三人の「強迫的冒険症」の人、E・T・ロレンス、ヘミングウェイ、チャールを紹介し、いずれも、母親の冷たさなどが大きな原因になっている点を強調します。

そして最後に、人間にとってもっとも大事な、愛する

能力がどのように育つものかを、自己への愛(ナーシシズム)に終始する人と、対象に向けられる愛にまで発展する人とをあげ、伝記のなかで大好きだった人の例をひいたりしながら、分析をすすめてゆきます。

以上の短い紹介でわかっていただけただかどうか不安ですが、現実の子どもを見る目と伝記資料での具体的な例と、心理学の理論とを、ないまぜながら、一人人間はどこまで自由なのか、教育によって変えられるのか、母親の影響がどんなに大きいかなどの問題に迫ってゆこうと努めました。少しでも人間理解にお役に立つなら、大へん幸いです。

(山梨大学)



保育の一日 (3)

——存在世界としての保育——

津守 真

今回のこの連載のシリーズを、私は、前回の「保育の体験と思索」で行った考察の前提にある保育の実践を明瞭にすることを課題として書きはじめている。実際の保育の中で体験する具体的な現象の考察は、私にとって最も興味深い保育研究である。しかし、今回はそれをしばらくおいて、生きた現象を生み出す保育の実践を、保育者の側から明らかにしてみたいと思っている。

実践の第一の主題として、出会うことをとり上げた。前回は、1、出会うことから保育がはじまること、2、他者としての子ども、3、語義から考えることについて記し、今回はそのつづきである。

一、出会うこと（つづき）

4 先人観を取り去って見ることに

幼い子どもにふれるとき、私どもは、自然におとなの固い殻をとり除かれて、人間に立ち返ることができる。これは幼児がもつ力である。

そんな幼児の前において、私共はしばしば自分の考えで頭がいっぱいになると、子どもと出会えなくなってしまう。おとなの心の

中にある先入観や枠をとり去る努力がおとなの側に必要になるのである。

ルードイッチ・クラゲスが、現象をそのままに見ることができなくさせる眼がおとなの中にあることを述べ、物を見る目の基礎にある知覚の担い手について論じている個処に記されている有名な神話がある。真夏のある日中に、森の中を二人の男が散策している。一人は熱情的な風景画家であり、他の一人は同様に熱情的な建築業者である。同じ森の中にいながら、二人は別のものを見ている。「画家は幹の形態、風にそよぎ、日影洩る木の葉の繁み、それを縁取る青空に点する遠くの白雲などに魅せられているのに対し、建築業者は一瞥しただけで、地面の概測的広さ、伐採しうる木材の売り値、住宅街の建設用地、鉄道計画につれて騰る地価其の他に關して、十分に電撃的な評価を下すに足るほどである。即ち前者では樹林の性情の一面を『現象』させる感知形象が生れたのであるが、後者は感知形象を素通りして、それと同名の物が役立てられる目的を知覚しているのである。」^(注1)画家は、森の本質をあらわす現象を感知しているが、建築業者は利害關係を伴う目的だけを見ていて、森そのものを見ていない。それは「概念的知覚」であって、その「概念の殻を打ち破る見込みは、それ自体本来既に運命的恩恵の事柄」なのであるけれども、それがなさ

れないと、現象をそのままに見ることはできず、そのものの本質にふれることはむづかしい。

同様のことが保育の中でしばしば起る。同じ子どもと何度も顔を合わせていても、心がかみ合わないとき、私共の心の中にある概念の殻や、無意識の前提が、その子どもをそのままに見ることを妨げることが多いのではないかと思う。その日の予定や計画で頭が一杯になっているとき、特定の理論の枠に合わせて子どもを見ようとすると、善悪、正常異常などの規準をもって見て、その相対性に気づかないとき、その観点からしか子どもを見ることができなくなる。子どもの方から見れば、自分が心から望んでいることにこたえてくれないおとなとしか映らないであろう。子どもにふれるとき、保育者は、いろいろの自分の考えがあっても、できるだけ心を透明にして、子どもをありのままに受けとるようにつとめる必要があると思う。

こう云っても、私共は、自分の眼を完全に透明にすることは到底できない。そのことを気づかせられるのもまた、子どもとふれる時である。どうしても出会うことがむづかしい子どもがいるとき、おとなが偶然にころんで床に倒れ、子どもが上から見下ろしてはじめてにつこりと笑ったことからつき合えるようになることもある。普段はおとなが子どもを見下しているのに、偶然の機会

に上下の位置が逆転することによって、それまで子どもと対等の位置でつきあえていなかったことに気付かされるのである。

また、しばしば他の子どもの髪に手をかけたとき、ある日の日に、傍にいた子どもの髪に手をかけたとき、私と子どもと目があった、私はその子の方に向き直って遊んだ。そのときから、その子どもと応答してつき合うことができるようになり、その子どもはもはや他の子どもの髪を引張らなくなった。髪を引張る子どもときめて見ていたおとなの見方が破れたときに、子どもとの間に別の関係が生れたのである。

おとなと子どもとは、身体の大きさ、位置関係、力、経験の量などが違っていているのは、存在そのものもっている相違である。そして、大きい者が小さい者を、強い者が弱い者を守るようになっているので、おとなも子どもも安定して生活できる。おとなと子どもとはいろいろの点で異った役割をとるけれども、同時に、おとな子どもという区別をはなれて、人間として出会い、交わることでできる存在である。日常の区別が逆転する危機的な機会に、両者がそのことを発見することがしばしばある。この瞬間があることによって、人と人とが出会うのであり、私共はその機会を逃さないようにしたいと思う。

おとなの存在に伴う先入観について述べたが、教師と子どもの

場合には、教師という社会的役割に伴う先入観が付加される。教師という社会的役割があるので、幼稚園や学校の組織と人間関係が保たれるのであるが、他方、子どもと直接にふれる保育の現場では、ただのおとなと子どもとの関係になるのであり、そのことが教師の役割の重要な内容でもある。おとなと子どもとの関係には、それをこえて、人間と人間との出会いがあることをすでに指摘した。人として出会うことがなければ、教師という仕事は成り立たないともいえる。とくに幼児は、だれであろうと、出会うことのできる人に信頼を寄せ、交わり、その人を通して成長する。幼児と出会うところでは、人は真に人間となることを求められているのである。

親についても同様のことがいえる。親は生物的、運命的に子どもと結びついている点で、社会的役割としての教師とは異なる。しかし、この場合も、人として子どもと出会うことが、親の課題として存在しているのであると思う。親にとっても、子どもは未知の世界をもつ独立の人間である。この認識を失うと子どもを支配する存在となりやすい。親のまた子どもの世界に人間としてふれることによって、自らも学び成長してゆく点で、他の保育者とはわらない。

おとなは、それぞれ、自分自身のさまざまな問題をになった存

在であり、それがいろいろの形で子どもに反映されて、先在観、先入観、偏見などになるが、子どもと直接にふれるところでは、それを克服することが課題となるのであると思う。それによって子どもと出会うことができるようになり、また、子どもと出会うことによって、より大きな心になれるのである。このような機会が日日与えられていることは、保育にたずさわる者のもつ特権である。

5 偶然と意志

子どもと出会う機会は、おとなにとっては、思いがけないときに、向うからくる場合が多い。予期しないときにくることを、どのように受けるかということがおとなにとっての課題である。

朝起きたとき、まだ心の準備ができていないときに、思いがけない仕方では子どもは私共に向ってくる。また、幼稚園で、朝、最初にどの子どもと顔を合わせるかは、あらかじめ知りがたい。朝、偶然に子どもと出会ったところで、腰をすえて交わることから一日の保育ははじまる。子どもの側から云えば、おとなから受けとめられてはじめて、その一日を自分のものとしてはじめることができる。

偶然に意味があることを認識して、それにこたえてゆく意志をもつことである。受けるということは、受動的で消極的なことと考えられやすいが、子どもと関係なしにおとなの意図を進めるよりも、ずっと積極的、意志的な行為である。

子どもと出会うことは、こちらから求めて得られるとはかぎらない。向うからくる機会を待たねばならないから、その点では受動的である。しかし、出会う偶然がかならずあることを予期し、その機会をねらっているから、その点で意志的な行為である。(注2)

おとなの意図の中にはいりきれない偶然のできごとが起るからこそ、私共は、自分とは異質な他者をふくめた、生きた現実の世界の中に身をおいていることがわかる。その中で、それぞれの子どもが、自分の最善を実現できるようにするところに、保育のほたらきがある。それには、保育者が偶然を受け入れて、それぞれの子どもと出会うことが求められる。そこからはじまって、子どもも応答し、交わってゆくことによって、子どもは自分の活動をつくり上げてゆく。このことは後の項でふれる。

6 出合いについて書物から考えたこと

出会うことについて、保育の中のこととして著わされた書物はほとんどない。出合い一般について書かれたものについて、私が学んだことの中から一、二を記したい。^(注3)

最近私が手にしたポイテンダイクによる「出合いの現象学」(F.J.J. Buytendijk: Zur Phänomenologie der Begegnung)という論文が、エラノス年報(一九五一)の中にある。ポイテンダイクは、すでに故人であるが、オランダの現象学的教育学者として活躍した人である。これは甚だ難解な論文であるが、その出合いの考察にあたって、彼は甚だ難解な儀式における出合いから出発する。宗教の儀式における人と現実との出合いが教育とどのように関連するか、十分に理解できない点があるが、そこからはじまって、出会うという事態の中で、他人という底知れない淵の彼方にある神秘的な存在が自らの本質をあらわすという。その他人というのは、自らの自由に根ざした存在であり、その人のもつ運命以外には束縛されない存在である。

このことは、保育場面において子どもと出会うときにも、私共は認識しうることである。

人間生活の多様な場面における出合いについて、より立ち入って研究し、そのできごとの意味を問うときには、学問的な決断を必要とするとは彼はのべる。すなわち、実証科学思考の様式をすすめること、そして、出合いと名づけられるできごとを、客観的に連関し合った知覚世界の断片として理解することをやめることが要請される。「われわれは、出合いを多くの現象の中のひとつとして、すなわち、人間の行動を断片的に傍観者の立場から記述した事実のひとつとして見ようとはしない。そうではなくて、われわれの存在がそれに出会う人々の存在と結合されるその存在関係を選ぶことを決意し、この結合においてのみ、出合いにおいて人間の固有の本性の理解が可能になることを確信する。」と彼は云う。「われわれは、生の現象と社会過程のいわゆる客観的観察者という存在関係の形式から意図的に身をそむけることによつて、はじめて、われわれ自身のものとしての現象世界が、新たな直接の意味内容を開示するのである」と。^(注5)この論文が一九五一年という時期に、丁度、客観的観察が教育の世界にもほとんど絶対的要請をもって導入されはじめた時に書かれていたことに驚く。客観的観察をどのように評価するかは別に置くとして、存在と存在とが出会うところからはじまる保育において、自らが子どもと交わる中でとらえられる現象を根拠とすることなしに、子どもの理

解は生れない。この論文が書かれて後に、子どもの客観的、科学的研究は数えきれないほど多くなされてきたが、この著者のような立場でなされた研究はきわめて少ない。

保育界においても、現場で子どもと出会って、さまざまな体験をしている保育者が、自からの体験を根拠とせず、子どもと出会わない客観的研究による理論に頼っていることが多い。現場の保育にたずさわる者は、自分のとりくんだ子どもと保育のできことを、率直に記し、また語り、その底にある自分の見方を検討することが必要なのではないか。それが保育研究の出発点となる。

「われわれ自身のものでしたの現象世界が、新たな直接的意味内容を開示する」ということは、保育の世界にひきうつして云うならば、こういうことではないだろうか。

ポイテンダイクは、心理学者であり、哲学者であるので、この論文で更につづいて、フッサール、ハイデッガー、ビンスワンガー、シュトラウスなどの著名な現象学者の見解を引いて哲学的考察をすすめているが、ここではこれ以上立ち入らない。

「出会い」という題名で著わされ、自伝的断片という副題をもつ、マルチン・ブーバーによる小さな本がある。ブーバーは「我と汝」という一九二〇年代のはじめに書かれ、大きな影響力をも

った書物の中でも、出会いについての根本的概念を述べているが、「出会い」というこの小さな書物は彼の最後の著作であった。生涯の体験の中で印象深い人々との出会いの体験を具体的に記している。その具体的な記述は、それ自体で感動を受けるが、私は保育における出会いのことを考えていて印象づけられたのは、出会いにおける「ゆきちがいがい」のことである。ブーバーは、これを *Begegnung* (出会い) に対して、*Vergegnung* (ゆきちがいがい) という語を用いて語っているが、それは母についての記述のところである。幼いときに別れた母と何十年も後に再会したとき、「私は、どこからか、『ゆきちがいがい』という言葉が自分に向かって語られるのを聞かずには、彼女の、(注6)相変らずびっくりするほど美しい目を見ることができなかったのである」と彼は記している。この大哲学者の心中を簡単に推量することは控えねばならないが、ここで云われている「ゆきちがいがい」ということは、保育者と子どもとの間で起るであろうこと、また現に起っていることを、私は考えないわけにいかない。保育者に善意がないわけではなく、しかも、保育者の負っているいろいろの事情のためにゆきちがいが生じるとき、それは人間が互いに負っている運命のようにも思える。それだけに、保育者として子どもにふれるとき、ひとりの人間となつて出会うことができるようにと願うのである。人と出会

うことを望みながら、どうしてもそれができないことが、人間には起るのである。保育者と子どもとの間も、例外ではない。

もうひとつ、出会うことができなくなった体験として、祖父母の農場のお気に入りの「馬」^(注7)のことが語られる。その信頼を寄せてくる馬のたてがみによって経験されたものは、「他者、つまり、他なる者のはかり知れぬ他者性」であった。そのとき、馬もまた「重そうな頭をするすともち上げ」わかったという合図を送った。ところがあるとき、「馬をなでながら、急に、それが自分にとってどんなに面白いことか、に気づいた。すると、突然、私は自分の手を感じたのであった。愛撫はいつものように行なわれた。しかし、何かが変わってしまった。そこには、もはや、あの他者がいなくなったのである。」そして、次の日に、「この友の首をなでてやったとき、彼は頭をあげなかった。」これと同様のことがまさに保育の中で起る。子どもの行動を面白いと思いい、わかったと思ったりとき、子ども自身は遠く離れてしまっていることがある。子どもとふれるときには、それまでに考えたことはわきにおいて、自分自身を透明にして、子どもと共にいることをつとめる。しかしまた、子どもが去った後には、私共はこの体験を考える作業をはじめ。それは面白い作業であり、理解を深める作業である。しかし、次の日に子どもとふれるときには、それまで

考えたことはわきにおいて、全く新たに子どもと出会う一日をはじめるのである。

注1 L・クラীগス、千谷七郎訳 表現学の基礎理論 P107—108

注2 保育者が無意識のうちに、出会うことを模索している例として、人間現象としての保育研究2の中の小野英子「子ども

と共なる保育者」(光生館一九七五) P163—170を参照された。

注3 教育における出会いについては、ボルノー 実存哲学と教育学(理想社、昭和41年)の中で、第五章出会いに包括的な論説がある。

注4 F.J.J. Buytenjck: Zur Phänomenologie der Begegnung. Rhein-Verlag, Zürich, 1951

注5 前掲書、P 433—444

注6 ブーバー 児島洋訳 出会い——自伝的断片 理想社 昭和41年 P 7

注7 前掲書 P 25—26

今年もまた、時の糸車は、十二月の月を紡ぎ終えようとしている。

「この一年、子どもたちはどう変わっただろうか」。保育者のまなざしは、慌しく、一人々々の上に注がれるだろう。そして、「あの子は、あそこが

変わりかけている」「この子は、これが出来かけている」と、

子どもらのあちこちに幾つかの「徴」を見出し、幾らか安堵したりする。それに学校暦は三月で区切られる。何しろ、まだ、三ヶ月残っているのだから……。考えてみれば、保育というこの営みは、かなり、楽天的な気分を支えられているものようだ。

子どもらの上に見出される「変化の徴」は、一見、取るに足りない、極く些細なものが多い。然し、そんなささやか

な変化こそ、保育者の生き甲斐となり、明日を支えるエネルギーとなる。天下國家とはほど遠く、地球の運命ともかかわりなく見える「いと小さき営み」、それが保育なのだ。



然し、「神は、細部にこそ宿り給う」のではないか。

時間は、しばしば、「糸車」のメタファーでとらえられ、その経過は、「紡ぐ」

と呼び慣らされてきている。しかも、その紡ぎ手は、大凡、女性であった。混沌とした毛の塊を気長に糸車にかけて、長くしなやかな糸に紡ぎ上げる。そんな行為は、猛々しく力ある男性のものではない。単調に見えるその動作に心穏かに耐え、僅かずつの糸のたまりをいとおしむその強さは、野を駆け、獣を狩ることの対極に位置して、女性の分け持つべき重いつとめと見なされたのである。

「ゆっくりと」「くり返して」「ささやかな蓄積を」、これが紡ぎ手に寄せられる期待であった。

保育者もまた、幼い人の「成長する時」の糸車を、「ゆっくりと」気長に廻し続けねばならない。それは、訪れる新しい年にも、変りなく「くり返される」営みである。そして、その「ささやかな蓄積を」愛でるまなざしが、やがて、新しい人間の誕生に立ち会う光栄に浴すことにもなるのだから……。

(H)

乳児の保育

久保登志子・中村千代・丸尾ひさ 共著

A5判・224頁・定価1,300円 千250円

0～2歳までの乳児保育の実践と、指針を示しています。

背骨が曲っている、すぐ骨折する、朝から欠伸をして、授業にのってこない等と、子どもの危機が叫ばれている昨今、そのルーツは乳児期の育てられ方にあるのではないかとされています。健やかで意欲的な子どもを育てるために保育者は何をしなければならないか？長年乳児保育を実践して来た三人の著者に豊富な事例と体験を語っていただきました。

幼児の造形百科

桜井俊夫 著

B5判・248頁・定価1,900円 千300円

幼児の造形活動に関する幅広い知識と技術を身につけよう。

本書は幼児に必要な造形活動の基本的な考え方をはじめ、子どもの発達に応じた指導計画のたて方、さらに具体的な素材別指導方法などをとりあげた総合的な造形指導百科です。「描く」「写す」「映す」「作る」「壁面構成」の五つの柱からなっていて、身近な紙、粘土、木、発泡スチロール、段ボール箱などの特色を使った造形遊びの指導書です。

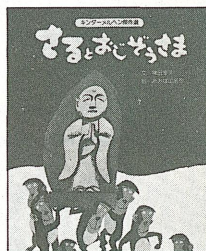
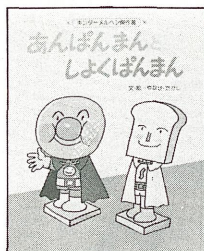
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

ユニークなお話絵本

キンダーメルヘン傑作選

— 6冊セット — 美麗ケース付 セット定価 2,880円



⑦ あんぱんまん しょくぱんまん

■文・絵＝やなせ・たかし

パン作りの名人、ジャムおじさんによって作られたあんぱんまんとしょくぱんまんは、どこかでおなかをすかして困っているひとを助けるために今日も西へ東へと飛び立ちます。勇気ある活躍話です。

⑧ りすさんのさんぽ

■文・絵＝花之内雅吉

月夜に誘われて散歩に出たリスは、どこまでもついて来るお月さまと友達になります。リスが隠れるとお月さまも隠れます。リスが走るとお月さまも走ります。子どもの興味をひくたのしい物語です。

⑨ おかしなむし〜つけた

■文・絵＝木曾秀夫

“ほつきす”は“きりぎりす”に“せんたくばさみ”は“ばーんばつた”に。子どもたちが見なれたものたちから、おかしな虫が生まれます。アイデアあふれるたのしい話です。

⑩ おとうさんはライオンみたい

■文＝森山 京 絵＝稚野利一

本当に強いものは、やたらに強がったりしないものだ。おとうさんに言われてライオンはおとなしくなります。本当のやさしさ、強さについて親子で考えてほしい心温まる話です。

⑪ ちょうになったぞう

■文・絵＝佐々木マキ

チョウになりたいと思っていた子ゾウ。「ちょうになりたいぞう」と5回唱えると子ゾウは美しいチョウになりました。子ゾウはうれしくてたまりませんが、ある日、人間に捕まってしまう。

⑫ さるとおじぞうさま

■文＝稗田宰子 絵＝おお比呂司

おじいさんが山に柴刈りに行くとき、さるたちがおじぞうさまをかついて川を渡っていました。不思議に思ったおじいさんが、おじぞうさまのまねをして立っていると、お堂の中につれて行かれます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館